

PUREGOLD

youngs meet dream

監修
北原照久
矢野雅幸

著者
鈴木重美

Photo: _k2011_

二人の主人公は出会うことで成功の欠片^{かけら}を見つける。
二人はサクセスはつかむものだと思っていた。
しかし、本当に大切なのはサクセスでなく、夢を持ち続けることだと
わかったのだ。
終わりのない旅の物語
二人は時代を疾走する。

PURE GOLD

young's meet dream

二人の主人公は出会うことで成功の欠片^{かけら}を見つける。

二人はサクセスはつかむものだと思っていた。

しかし、本当に大切なのはサクセスでなく、夢を持ち続けることだと
わかったのだ。

終わりのない旅の物語

二人は時代を疾走する。

プロローグ

街に眠る宝を掘り起こすために^{ゴールドラッシュ}GOLDRUSHの旅に出た二人の主人公
時代の荒波に^{ほんろう}翻弄されながらも若さ故の特権である純粋な野望を胸に都会の荒野を
^{しっそう}疾走する
^{Pure}ピュアだからこそ、傷つきながらもサクセスストーリーを夢見る二人
ちっぽけなトランクに詰まっているのは大きな夢
夢だけが財産だったあの頃
土砂降りの雨にずぶ濡れになっても、その雨がダイヤモンドの雫になる
二人の^{Pure} ^{ゴールド} PURE GOLDな旅は続く

ホームに Night Train
財産は トランクとギターだけ
場末の Dance hall
渡ってく 幻の Yeah Yeah
Rock Star ダイヤモンドの雨が降る
All night ギターが泣くたびに
All right チャック・ベリーもエルビスも Once dreamed
もしコイツに逢わなけりゃ、Bad boy

夢を見た。

ヤノさんと旅をしていた頃の夢だった。

ヤノさんとボクはおもちゃ探しをしてオンボロ車で小さな町のおもちゃ屋巡りをして
いた。

何度も見た夢だ。

夢を見ていながら、ボクは途中からこれは夢の中だと気づく。

大抵は古い倉庫の中にいる。懐中電灯を^{かざし}翳しながら、奥まで進んでいく、するとまだ
全く見たことのない、もちろん誰も見たことないおもちゃの箱が入ったダンボールを
発見する。

このあたりから 「これはきっと夢に違いない」と夢の中のボクは勘づく。

それでもこれはもしかしたら現実かもしれないとおもちゃの入った箱に手をやる、間
違いない箱の質感まで手のひらにはリアルに残っていた。

間違いないこれは夢じゃない「やったー」と興奮した時に、いつも通り夢から覚め
る。

やっぱり夢だった、とベッドの中で一瞬は落胆するが、いつもの通り、これが夢だっ
たと確信に変わったところで落胆した気持ちも消える。

しかし、この日の夢はいつもと違っていた。

夢から覚めると、携帯が鳴った。見慣れない番号だなと思いながらボクは電話に出
る。

すると懐かしい声が聴こえてきた。

キタハラさん、おはよう！

誰？

ボクだよ

ボク？

誰？

何言っているの？キタハラさん、ボクだって。

えッ、ヤノさん？

ヤノさんなの？

隣で寝息を立てている妻を起こさないようにベッドを抜け、部屋をそっと出る。

ボクは声にならない声を出す。

まさか、だって、ヤノさんは声が出ないんじゃない……

電話の相手を思い、言葉が詰まる。

「何、寝ぼけているの、キタハラさん、今日もおもちゃ探しに行こうって約束してたじゃない？」

おもちゃ探して、

今は、って言うか、ボク達がおもちゃ探しをしていたのは……

40年以上も前のことだし、

寝ぼけているのか、それとも本当にボケてしまったのか、ボクの頭は混乱している。

ヤノさんは発病以来、手足の自由はもちろん、首から下の肢体の自由は全て奪われ、言葉も発することができない。

そのヤノさんが電話をできるはずがない。

「わけのわからないこと言っていないで、今、山手の博物館の前に車で来ているから、早く降りてきてよ。庭の方にまわるからさ」

電話の向こうでヤノさんは笑っている。

混乱しつつも、とりあえず携帯を切った。

その携帯電話の画面で時間を確認するとまだ午前7時を回ったばかりである。

博物館の窓の隙間からは朝日が差し込んでいる。その窓から庭を見る。

庭の芝の上には確かにヤノさんがいた。

それまで^{はんしんはんぎ}半信半疑だったボクの気持ちはそこにいるヤノさんを見つけたことでその疑いは吹き飛んだ。

ヤノさん！

ボクは博物館の大きな扉を開け放ち、ヤノさんの元へ向かった。

キタハラさんともう一度旅をしたくなってね……

ヤノさんは若い頃、俳優の草刈正雄にそっくりだというのが自慢で、まさに今ボクの目の前にいるヤノさんは草刈正雄が30歳に若返ったような姿で立っている。

「治ったんだよ」

ヤノさんはそう言った。

「治ったの？」

ボクはヤノさんの言葉をそのまま繰り返した。

「ほら、京大の山中教授の実証した IPS 細胞がさ、ボクの体でほぼ無限に増殖する能力を獲得したんだ。その第一号患者がボクってわけさ」

ヤノさんはそのことが最高に嬉しいのだろう、自慢らしく、誇らしげにキタハラに伝えた。

朝日が芝の降りた^{つゆ}露に反射し、キラキラと光っている。

よかった！ヤノさん、本当によかった。ボクは涙で目の前が曇った。

ヤノさんは笑いながらこう言った。

「さあ、キタハラさん！次行こうよ！次！」

「次行こう」ヤノさんがボク達の決まり文句を言っている。

ヤノさん、そのセリフはおかしいって……

ボクはヤノさんに近づいていきながら、話す。

するとボクが近づいた分、ヤノさんはボクから離れた。

ヤノさん、ふざけないでよ、全く、

「次行こうよ！次！」っていうのはおもちゃが見つからなかった時、お互いを奮い立たせる時に使っていたんじゃない？

「だからさ、キタハラさん！次行こうよ！次だよ」

ヤノさんは再び同じセリフを繰り返した。

何言っているの、ヤノさんは病気が回復したんでしょ、
だから次じゃないって……

えッ？

ボクの心の中を大きな黒い雲が覆い出している。

次じゃないって！

ボクは今にも叫びそうになる……

ヤノさん、病気、治ったんでしょ？だから次じゃない……

まさか、夢から覚めたはずなのに、これも夢……

ボクは押し寄せる絶望に押し潰されまいとヤノさんに向かって歩く。

ヤノさんは、今度ははっきり口にした。

次に行こう！キタハラさん！

ボクは決して諦めないよ、キタハラさん。

ヤノさんに近づこうとするとヤノさんはさらに遠くに行ってしまう……

ヤノさん！

ボクは夢から覚めた。身体中寝汗をびっしょりかいている。

そしてボクは覚めながら泣いていた。とめどもなく涙が頬を濡らしている……

朝起きると、一人の科学者がその人生を閉じたことをニュースは伝えていた。

昨夜、星になった偉人は身体の筋肉が徐々に動かなくなる筋萎縮性側索硬化症
(ALS) と闘い続けてきた「車いすの天才科学者」のステイーヴン・ホーキング博士
だった。

キタハラがその知らせを聞いた同じ日、ヤノもその知らせを聞いた。

独創的な宇宙論を発表し続けてきた博士は、科学の未来、そして人類の未来について多くのメッセージも遺していた、と同じニュースは伝えていた。

ホーキング博士の功績はあまりに大きく、一言では言えないが、それでも博士は人類史上最高の謎を解き明かすことを誰でもわかるように言葉を使いながら説明し続けたことが何より尊いことだとヤノは思っていた。

博士の発病は21歳の時だということだった。

世界最高の知性のひとりでもあったホーキング博士は身体機能が徐々に失われていったとき、彼はいかにアイデアを整理し、独創的な理論をかたちにしていったのかを死を伝える哀悼のメッセージには綴られていた。

こんな内容だった……

「星を見上げること、足元は見るな」

「事を決してあきらめないこと」

「仕事は意味と目的を与えてくれる。仕事がないければ人生は空虚、そして幸運にも愛を見つけることができたなら、その存在を忘れず、投げ出すな」

幸運にもヤノは3つとも実行しているし、愛の存在をしっかりと受けることができていた。

そんなホーキンス博士と同じ境遇になるとはもちろん夢にも思わなかった。

ヤノの発病は60を過ぎてから、体の異変から、病名の決定までが人生の最悪の時期だった。

悪夢としか言いようのない状況で何かに救いを求めたが、現代医学ではどうすることもできず、当時は家族の差し伸べてくれた無二の愛にもボクは怒りをぶつけて、妻や子供を罵倒した。

神はいない！と天に叫び、^{じぼうじき}自暴自棄になった

仕事は続けていたが、それでも以前ほどのエネルギーを持って仕事での困難を突破することはできなかった。

そんな絶望の淵にいたヤノに親友がプレゼントをしてくれた。

二人の宝探しという青春時代を題材にしたミュージカルにしてくれて、ヤノを劇場に招待してのだ。

苦しくて、絶望して、ヤノは泣き明かしていたので涙は枯れてしまったと思っていたが、それは間違いだった。

ヤノはそのキタハラがプレゼントしてくれたミュージカルのステージを見て、人目もはばからず号泣した。

泣いても泣いても涙は溢れ出る。

苦しくても涙はこぼれる、感動しても涙はこぼれる、しかし苦しい時の涙はいつか枯れるが、感動の涙は決して枯れないことをこの日、改めて知った。

そしてヤノは^{よみがえ}蘇った。

親友は生きる望みを与えてくれた。

その物語の中で困難に当たると「次に行こう」が二人の合言葉だった。

おもちゃの宝の山をライバルに奪われたり、落ち込んだ時、失恋で立ち直れない時、親友は「ヤノマン、次だよ、次行こう」と言って前を向かせてくれた。

それを今、この状況でヤノに思い出させてくれたのだった。

“ボクにも次がある”ということ……

ヤノは不治の病という絶望の淵から蘇り、失われたと思っていた社会とのつながりを得ることができ、ヤノは回る地球の中で自分が生きているアイデンティティを得ることができた。

ヤノはミュージカルが好評で再演が決まると、そのミュージカルのポスターをデザインしようと決める。

ミュージカルの素晴らしさがヤノに火をつけたのだった。

デザインがしたい。

しかし、どうやって

ペン1本も握れない、パソコンだって……

無理か……

いや、諦めるな……

何か、方法があるはずだ。

ヤノは“自分がデザインをする”ための手段を探す。

ひらめいた！

そうだ、彼なら……以前ヤノのデザインスタジオで働いていたアミノの顔が浮かんだ。

ヤノはすぐ元デザイン事務所にいたスタッフに連絡を入れさせた。

「ポスターのデザインをするから、アシスタント頼みたい」

そのメッセージを受け取った元スタッフのアミノは何の躊躇^{ちゅうちょ}も無く「了解」と返信した。

連絡を受けたのはアミノヨシヒコ。

ビタミンスタジオに在籍していたのは1992年から1996年の約5年ほどだった。

特に大きな不満もなくそのままそこでデザインの仕事するつもりだったが、社長のヤノがデザインを辞めて、ウイングクラブという趣味の航空機デスクトップモデル専門店をやると言い出し、ビタミンスタジオは1996年に解散。アミノは仕方なくフリーになって、デザインの仕事をしていた。

そんなヤノさんがALSに罹っていることはアミノも知っていたし、その中でデザインすると言って連絡をしてきたことにただただ涙した。

ヤノさんがデザインする！

これは凄い事だと身震いした。

しかし、一体どうやって、

できるのか？

ヤノさんから伝達したイメージをデザインする……

本当にできるのか……

いや、できる、できないじゃない……

元ボス、元師匠のヤノさんが“やる”と言っているんだ。

理屈じゃない、可能性の問題でもない、ボクはヤノさんの手になり、線を引き、色をつければいいんだ。

デザインする事を受け、アミノはヤノの事務所に通う日々が始まった。

初日から、これは大変な事になる……そんな想像はすぐ現実になった。

以前のヤノさんなら数時間足らずで作業しただろう、1枚のポスターに一体どのくらいの時間がかかるのだろうか？

ヤノさんが介護士に意思伝達をする。

それを介護士がボクに伝えてくれる。

ヤノさんが「このトーンはマゼンダ（赤系の色）強めにしてくれ」と言っています。

ボクはその指示通りにマゼンダを強く反映したカラーをパソコンの画面に映し出す。

およそ、この流れだけで2時間が経っていた。

一本の線を決めるだけでその日の予定していた時間が経過する。

もちろん、アミノはいくらでも付き合うつもりで来ていた。

しかし、ヤノさんの意思を伝達してくれる介護士の方の負担も、アミノ以上だった。

慣れないデザイン作業を“翻訳”していかななくてはならない。

2人の介護士が交代で作業に当たるが、それでも4、5時間が限界だった。
その4、5時間で“線が一本引けた”というのが1日の作業量なのだ。

これは大変な事になるぞ……

もちろん、諦めようという気持ちは全く湧かないが、果たしてポスターのデザイン完成するのだろうか？

そんな気持ちに押し潰されそうになる。

もしかして、“明けない夜があるかもしれない”、アミノはそんな気持ちにもなってきた。

それでもどうにかミュージカルポスター完成に近づき、気持ちも少しホッとしていると、ヤノさんは次に「アミノ、パンフレットの制作をするよ」とアミノに伝えた。

デザインという細かなニュアンスをカタチにする部分も多々ある作業では、なかなかヤノさんの“こうしたい”が理解出来ない、自分にイライラしたり、なんだか申し訳ない気持ちになることもある。

そんな時もヤノさんは不敵な笑みを浮かべながら、次どう伝えてみようか考えてるようだった。

アミノはこのデザインを通じて、ヤノの気迫を感じた。

その気迫はまさにヤノの「生きることへの^{かつぼう}渴望だった」
一本の線にヤノは命を注ぎ込もうとしているようだった。

5年間一緒に仕事していたので、文字盤を通じて言葉にしてもらってる途中で、
「あ、ヤノさんのしたいことってこういうことか!？」とわかる部分もあって、トータルで振り返ると、やりとりが遅くてなかなか進まないというというとは次第になくなっていった。

ロゴのデザインから始まって、背景に使うテクスチャーの選択から個々の色のシミュレーションも数しれず。散りばめてあるおもちゃはただランダムに配置しているのではなく、キタハラとヤノにしかわからないような符号が多く隠されていた。

元社長だし、何か恩返しをしたいという気持ちで引き受けたが、とんでもない。
アミノはヤノから大切な宝物をもらった気持ちになっていた。

完成してみると、全くもってヤノさんテイスト全開のデザインに仕上がった。
そうして完成したポスターとパンフレットは会場に貼られることになった。
アミノはミュージカル初日、家族で横浜の会場に向かう。
会場の入り口にはすでに大判に印刷されたポスターが晴れ晴れしく飾られていた。

ゲートをくぐる。すでに大勢の人が開演を待っている。

自分が手伝ったポスターが貼られ、パンフレットが受付に積まれていた。

ヤノさんがキタハラさんと会場に到着する人を出迎えていた。
その姿を見たらアミノはもうダメだった。
あらゆる感情が一気に込み上げてきて、その場で号泣し、ヤノさんの元へ行き、感謝
を伝えた。

社長、このデザインに関わらせて頂き、ありがとうございます……い……した。
ヤノさんの顔は涙で霞^{かすん}んでいた。



さあ、そろそろ物語を始めよう。

前編「GOLDRUSH」ではキタハラさんとボクとの出会い、そして宝探しの話をした。

この新しい章ではボクが物語の語り部になり、ボク、矢野雅幸と親友北原照久の物語の続きを話始めよう。

そう、ボクらは夢を信じていた。

その時代はサクセスストーリーを夢見ることでしか、人生を生きていることが証明できなかった時代だった。

でも本当に欲しかったのはサクセスではなく、サクセスストーリーと一緒に語れる無二の親友の存在だった。

描いたサクセスを追続けたとしてもたどり着けるのはひとにぎりの人だけだと頭では理解できたけど、それでも親友と夢を語り合ったあの日。

夢はいつしか幻に消える、しかしそれでも大切な友はいた。

80年代、ボクらは確かに夢を追っていた。

中学生になった時に香川県の観音寺市に転校してからは、田舎の自然の素晴らしさを満喫して、新聞で連載していた山川惣治の「少年ケニア」がボクにとってのヒーローで山へ入ってはイノシシを狩り、川では仕掛けを作って魚を獲ったりしたというのは全くの嘘で、都会から田舎に引越してきた生活は退屈そのものだった。プラモデル作りという男子生徒の通過儀式のような趣味に興味を失っていったのは、10代の男子の女子にもてたいという純粋な芽生えがあったからで高校2年生の時に無理やりクラスメイトを集めてバンドを作った。

中学生の頃はポピュラー・ミュージックを聴くのはラジオだけで、ボクは毎週ラジオで「9500万人のポピュラーリクエスト」を聴くのを楽しみにしていて、いつもヒッ

ト・チャートの1位～10位をノートに書き写すのが海外の音楽との唯一の接点だった。

当時はエルビス・プレスリー旋風が去り、日本ではビートルズとベンチャーズが台頭して来た頃だった。

もちろん、高校生のボクにギターを買うお金などあるはずもなく、プラモ作りの要領で見よう見まねで自作した3本のエレキギターを、同級生のけんチンが作った手作りの8Wアンプにプラグを差し込んで一つのスピーカーで3本のギターの音を鳴らすという^{あらわざ}荒技をやってのけた。

ギターが揃うとあとはドラムが必要になり、よこチンを無理やりメンバーに引き込み、ドラムを買えと脅^{おどし}したが、高校生のお小遣いでは買えるはずもなく、フライパンとバケツにダンボールで即席ドラムを自作して、練習に明け暮れた。

いや、正確には明け暮れる間もなく、近所に住む民生委員のおばちゃんが警察に「過激派のアジトから爆弾をつくる音が聞こえる」と通報され、1日目にして、活動停止を^{よぎな}余儀無くされた。

しかし、ガサ入れをされても真空管を使った火炎瓶は見つかるはずもなく、「ここで練習をせずに街の外れにある豚小屋の跡地でやれ」と警察官に説教もされず、解放された。

新築された小屋に移った豚が残した糞^{くそ}の匂いがまだ残る豚小屋でその匂いに悩ませながらも、ボクたちは今度こそ日々バンドの練習に明け暮れた。

さすがにフライパンとバケツでは人前で演奏するわけにもいかず、ブラスバンド部から太鼓とシンバルを借り、即席のドラムを用意して、ボクらのバンドは学園祭のステージに立つことが決まった。

ついに明日がステージだという放課後、ボクは「オリジナルの曲を君に捧げる」という手紙にその曲の詞を添えて、マドンナのサチコを校門に呼び出し、告白したというのは嘘で、誰もいなくなった教室を見計らって彼女が座る机の引き出しにそっと忍ばせた。

ステージが近づき、^{きゅうきょ}急遽バンド名を決めなくてはならなくなり、リーダーであるボクの一存でバンド名は“フォーピッグス”

“4匹の子豚たち”に決まった。

「ビートルズ」はカブトムシたち、「モンキーズ」は猿たち、そしてボクたちは豚小屋から生まれた「フォーピッグス」、猛特訓をしてボクらは学園祭のフィナーレのステージに立つ。

ケンチンの親父は街で唯一の土木建築業を営んでおり、息子を無理矢理生徒会長にさせた挙句、できたばかりの即席バンドを学園祭の“トリ”に出演させたのも、親父のゴリ押しであり、そのゴリ押しを可能にしたのは学校への多額の寄付金の力に他ならなかった。

おい！ケンチン、

“チン”言うな！

「ケニーって言えや」

“ケンチン”ことオオクラケンイチ、サイドギター担当はむくれて反論した。

「まあ、いい円陣を組もう」

こちらギター担当のヨコオマコトこと“ヨコチン”が言った。

なぜかボクの周りはみんな“チン”ばかりだ。

もう一人のドラムはタマダキンジロウ、周りからは“タマキン”と呼ばれている。

ボクは雅幸“マッケンジー”と呼ばせているが、周りはボクを“ヤノマン”と呼ぶ。

“ヨコチン”、“ケンチン”、“タマキン”、“ヤノマン”。

チン、チン、キン、マン、

女子にはとても受けが悪い。そりゃそうだろう。

ヤノは隣のケンチンとヨコチンとスクラムを組んだ。

ヤノマン！かっこよく決めてくれや。

タマキンはステージを前に顔面蒼白になって震えている。それでも精一杯、強がって、ボクを鼓舞してくれようとしているらしかった。

「おう！」

ボクはタマキンに応えた。

そしてこの時のために覚えてきたセリフを口にした。

アメリカではベトナム戦争への反戦ムードが高まっていて、ある革命家がインタビューに答えた内容を拝借し、アレンジを加えたものだ。

「ボクらの世代は戦争を知らない最初の世代だ。

何が大事かという、自分に進むべき道が自分で選べるってことだ」

ここでヤノは一息つき、周りを見渡した。

周りはあまりのボクのかっこよさに目を白黒させている。

所詮こいつらにこんな金言^{きんげん}が響くはずもない。ケンチンは手のひらに「人」と何度書いてはその手を舐めている。

おい！ケンチン、お前、何してんだ、ヨコチンが不思議なことをするケンチンに尋ねる。

これか？おまじないだ、「人」と手のひらに書いて、舐めると自分を落ち着かせることができるんだ。

本当か！タマダキンジロウ、“タマキン”が「俺もやる！」

俺もだ、ヨコチンも続く、しょうがない、ボクだけしないと、チームの和が乱れるだろう、ヤロウ！と答える。

ケンチンはもう一度、自分の手のひらに「人」という文字を書く。

おい、「人」ってどっちの側が長いんだっけ、

それじゃ、人じゃなくて、「入」だろ、

お前たち、本当にバカなんだな、ヤノは「そんなのどっちでもいい、早く書け！」

よし、全員、書いたな！みんなが一斉にうなずく。

よし、舐めろ！

四人はまるで、競い合うように一心不乱に手のひらをぺ○ぺ○ぺ○と舐めだした。

そして、唾液でべちゃべちゃになった手のひらを学生ズボンで拭くとスクラムを組んだ。

「いいか、最高のステージをしよう、大切なのはこれからどう生きるかだ、向か
うべき夢があるのかどうか。そこに尽きる。

俺たちは未来永劫、大人になってもこのステージを思い出すはずだ。」

ボクはあえて「俺たち」と表現した。

決まり過ぎるぐらいに決まった。国語が最低の成績のヨコチンにもこの熱い言葉は伝
わたらしい、顔を紅潮させている。

よし！行くぜ！

ヤノは「いくぞ」じゃなくて！「いくぜ！」と言った、そして

魂を燃やそう！エネルギーのアート！それがロックンロー
ルだ！と絶叫した。

体育館のステージでは前のダンス部の演目が終了したようだ。アナウスが聞こえた。

では観音寺祭、最後のステージです。

トリは3年生ヤノくん、ヨコオくん、オオクラくん、タマダくんの4人組で、いや間
違えました。

司会者はここで一呼吸おいた。

そして

ヨコチン、ケンチン、タマキン、そしてヤノマン！と絶叫した。

そこで“いいぞ！変態バンド！”と突っ込みが入る。

周りがゲラゲラと笑う。

まあ、笑いを取るもの必要だ。

ヤノは体育館のステージから観客席を見渡した。

司会は笑いが止んだことを見計らい、大声をあげた。

“フォーピッグス”のステージをどうぞ、お楽しみください！！

最前列を陣取ったクラスメイトは全員で“ブヒブヒ”と合唱してくれた。

演奏するたびに全女子生徒の悲鳴に聞こえたのはアンプにギターを擦り付けてフィード・バックやハウリングを起こしたメチャクチャな雑音で、気がついた時には最初にステージ前にいた人達が、会場の後ろの方で固まっていて、先生が見かねてアンプのプラグを抜いてボクらのバンドのデビューコンサートはそのままラストライブになった。

それでも、ボクには望みがあった。もちろんそれはマドンナのサチコに宛てたラブレターの返事だった。

その返事確かめるべく、今度はしっかり裏門に小走りして向かった。結局2時間待ったがマドンナは現れず、みんながキャンプファイヤーの火を囲んでフォークダンスに盛り上がっている中誰もいなくなったクラスに戻った。

暗闇迫る教室には一人マドンナが立っていた。

神様はいたんだ。

ヤノは生まれて初めて神に手を合わした。

マドンナは神々しく後光が差していた。

そしてマドンナは濡れたような唇を開いた。

ヤノの心臓はドクン！と音を立てた。

「ヤノくん、手紙ありがとう。返事を書こうと思ったけど、それより、今この場で返事を受け取って」

そう言ってマドンナはセーラー服を脱いで、下着姿になり、

「私の全てをヤノくんにあげる」

そう言って机に横たわった。

というのは全て嘘で、マドンナの机を覗くと手紙は消えており、読んではくれたんだと期待を膨らませたが、もしやと自分の机を覗くと真っ二つに破かれた手紙が入っていた。

青春は性春！

こんなものさ”と気を取り直し、校庭に目をやるとキャプファイヤーの炎が燃え盛り、その周りで男女が手をつないで踊っている。すでに校庭は暗闇になり、真っ赤な炎が校庭を照らしていた。

ヤノは失恋の痛手を忘れようと、その光景をぼんやりと眺めて、

“これが青春だ“

と涙をぬぐった。

いつか年をとって、結婚し、子供ができ、孫ができ、ヨボヨボのジジイになって、思い出すのはこのシーンだと思う、ヤノは天高く燃え上がる炎をしっかりと睨に焼きつかせようと思った。

ヤノマン、何ばしとるか？こんなところで、みんなもう踊っているけん。

早く、来いや、感傷に浸っている俺をケンチンとヨコチンが呼びに来た。

「ヤノマン、呼ばれるのは好かん言っとる、俺のことはマッケンジーと言ってくれ」
ヤノは口をとんがらせて反論する。

ケンチンは嬉しそうに、そんなことどうでもいいし、マドンナのサチコも踊っている、さっき手をつないだぞ、俺、しばらく、手洗わない！

と言って、ケンチンはサチコが触れたであろう自分の手のひらをクンクンと匂いを嗅いでいる。

マドンナも災難だ、ステージが始まる前にベロベロに舐めた手をつながれている。

いや、ということはオオクラケンイチことケンチンの舐めた手をマドンナが触れた。
これは間接キスなのか？

ケンチンをバカだと思いつつも、ヤノはどこか羨ましい自分がいる。

「ボクも匂いを嗅ぎたい」と言おうとした瞬間、その手をヨコチンが引っ張り、手を舐めた

バカ！や、やめろや！

さすがのケンチンも怒ったかと思ったが、彼は自分の手を舐められたこと怒るのではなく、サチコの触れた手の匂いが消えたことを真剣に怒っている。

ヤノはその情けない二人の姿を目の当たりにして、匂いを嗅がせてくれと言わなくてよかったと心底ホッとした。

早く、ヤノマンも来いや！

まあ、それでもいいやつだ、自分がサチコと手をつないだことを、ボクに自慢しつつも、わざわざオレを探しに来てくれたらしい。

ヤノは破れたラブレターをポケットに押し込み、校庭への階段を降りた。

みんながヤノを迎え入れ、“アンコール！”と言ってくれた。

ヤノマン！アンコール！

弾いてよ！ヤノマン！

燃え盛るキャンプファイヤーの炎は最高のスポットライトだ。

ビートルズもワシントン DC でのライブは全く自分が演奏する音が聞こえなかったとミュージックライフに書いてあった。まさにこんな感じだったのかと勝手な想像を試みる。

これがボクたちのライブだ！

バンドメンバーも4人全員が揃っている

その時、サチコと目が合った。少し申し訳なさそうな視線を送ってくれている。

彼女の表情も炎で照らされて、情熱を帯びているほど、美しい。

女は魔物だ、ついさっき、ボクが書いたラブレターを破いたくせに、そんなことをおくびにも出さず、微笑みを携えてボクと視線を合わせている。

ボクはもう一度心の中で「君に捧げる」と誓い、ギターのストラップを首から回した。

アンコールも何も、ステージでは1曲も演奏できなかったから、決してアンコールというのは正しくない、まあそこを議論しても始まらないので、アンコールというか、

リクエストに応え、“フニクリ・フニクラ”をアコステックギターで弾いた。3人もアコステックギターで続いた。ドラムはシンバルでリズムを刻んだ。

ウワーッ！

体育館のステージでは決して聞こえなかった歓声が校庭にこだました。

そのこだまは観音寺山にリフレインし、さらに大きく響いた。

ヤノは披露しようとしていたロックではなかったけど“フニクリ・フニクラ”をメンバー全員とアコステックギターで弾き、ロックンロール！と叫ぶ代わりにフニクリ・フニクラ”！とシャウトし続けた。

ヤノは夢から覚めた。

最近はいつもこのシーンで夢が終わる。

夢の中でのライブではめっちゃくちゃだが、ギターを弾いていた自分がいた。

今こうして手だけでなく、足も動かなくなってしまうと夢の中だけが幸せに感じてしまう。

夢の中でヤノはいつまでもギターを弾き続けていた。

夢なら覚めないでくださいと念じるとそこで夢から目が覚める。

頭だけがクリアなままであることが果たして良いのか、わからない。

いっそのこと頭の神経もどうにかなって欲しいと念じるが、神様は慈悲深くそれを拒絶する。

難病と診断され、絶望と戦いながらも、希望を持つんだと自分を鼓舞してきた。今は決して弾くことのなくなった飾り物になったギターに目をやる。

最近では自分の体で唯一クリアな反応をしてくれる脳も年相応な退化が始まり、昨日何をしていたかかが、曖昧なことがある。

その代わりに過去のことはより鮮明になっている。

無二の親友キタハラさんと旅に出た日のことはまるで昨日のことのよう覚えてる。

夜行列車で上京し、好きなデザインの仕事でサクセスを目指す。

親友との出会い、そして宝探しの旅を続けた。

そして独立、スーパースター矢沢永吉さんのデザインの仕事を取ることが幸運にもでき、夢を叶え、大金も掴んだ。そして次の夢が目の前に現れた。

仕事をグラフィックデザインから飛行機のデスクトップモデルの販売に切り替えた 40 過ぎの冒険も応援してくれる家族とスタッフに恵まれ、事業も軌道に乗った、さあ、これからだと思った瞬間、病魔がヤノに襲いかかった。

渋谷の百貨店でのイベントは大成功だった。主催者である百貨店の広告担当からも

労いの言葉が届いた。

今年の百貨店イベントでは“ぶっちぎり”の入場レコードだったらしい。

しかし、成功が大きければ、そのあとに続く、日常との落差が堪えた^{こた}。

何をしてもどうもしっくりとこない。妙な焦燥感がこみ上げるばかりだった。

梶原一騎の「巨人の星」のワンシーンで星飛馬の宿敵、花形満が大リーグボール打倒を目指している中、新聞記者に囲まれて、自分の少年期を回想するシーンがある。花形は記者たちに語る、「子どもの頃、祭りの後の過ごし方がわからない」というシーンがある。

記者たちは唐突の花形の回想に戸惑いつつも耳を傾ける。

祭りが終わり、家への道、それまでの華やかな空気が一転し、その帰り道の暗さが寂しさを募らせる。そんなシーンをキタハラは何故か思い出していた。

キタハラにとって、まさに祭りに匹敵するような自身のコレクション展示会の日々はその祭りの終わりがその後の日々を耐え難いものにしていた。

そんな焦燥の中でも、かすかな希望は自分でもこんな展示をできないか？ということだった。

そんなアイデアを誰となく話した。

それは自分のアイデアが素晴らしいものであるというよりは、荒唐無稽^{こうとうむけい}に思えたアイデアを周りの人はいかに受け入れてくれるのだろうという確認に近かった。

特に、この展覧会に実際に足を運んでくれた人には少しだけ前のめりで持ちかけた。

皆、キタハラに会うと、展覧会を絶賛してくれた。

「テルちゃん、展覧会行ったよ！」

「良かったよ、」

「おもちゃ、すごいね、あんなに持っていたんだ」そんな賛辞の言葉が続いた。

しかし、キタハラが展示を自分でやったら、どうかな？と尋ねると怪訝な表情に変わった。

「自分で、ってどういうこと」

キタハラは答える。

「自分でミュージアムを運営できたらな？って」

「テルちゃん、そりゃ無理だよ、ミュージアムっていうのはさ、国とか、大きな企業が作るもんだろ、」そう言って、笑って、話題を変えた。

確かに、ミュージアムを自分で作ろうというのはキタハラ自身も無謀^{むぼう}に思えた。

資金は当然の事、建物だって、マンションを借りるのとわけが違う。仮にミュージアムをつくる金を銀行から借りるとしよう。一体いくら必要なのか、見当もつかない。都心のある程度“地の利”がいい場所にした場合、買うのはハナから無理としても借りたっていくらぐらいかかるのだろう。

不動産価格の異常とも言える高騰さは、いつの間にか日本の銀行は、企業にお金を貸すときに「お仕事の内容やどれだけ儲かっているか？」ではなく、“企業がいくら不動産を持っているのか？”だけを見るのが普通になっている。

どう考えたって、おかしい……企業の価値がその商品やブランドでなく、所有する土地の値段で決まっているなんて。

その異常さは、にわか金持ちを生み、“土地ころがし”なんて言葉が生まれる始末だ。

キタハラはいつしか、展覧会前に一人、実家が経営するスポーツ店の地下室でおもちゃを梱包していたことを思い出していた。

数ヶ月前、ここでおもちゃ展を開催することに気持ちを高ぶらせていた。

仕事が終わるとそのまま地下室で一人、おもちゃに小さいシールを貼っていた。そのシールには番号が書かれていて、展覧会用にナンバリングされている。気の遠くなるような作業だったが、一度も苦しいと感じなかった。

展示期間が近づくと展覧会の企画会社が送り込んだアルバイトと二人、黙々と同じ作業を繰り返した。

いつしか地下室には重い空気が立ち込めていく。アルバイトも「タバコに……」と言いながら外の空気を吸いに行く回数が増えている。

来る日も来る日もおもちゃを薄紙に包む作業は彼にとっては修行僧になったようなものだったろう。

百貨店から「展覧会をしませんか？」と依頼を受けた際は、ただただ嬉しかったが、会期が迫ってくると本当に自分のおもちゃが人目に触れることに耐えうるのかが心配になってきた。

それとなく、その百貨店がそれまでに展示を行った実績を調べてみたりした。誰もが知る画家から始まって彫刻家、学校の美術の教科書に載っている名前と自分のコレクションが同列に並んでいいはずがない。そんな気持ちがヒシヒシと押し寄せてくる。そんな気を知らずにアルバイトが能天気と話しかけてくる。

「見にくる人いますかね？」

「それは言うてはならない言葉だ、禁句ってやつだ！」

そう言ってキタハラは香港マフィアから横流ししてもらった拳銃でアルバイトの心臓を打ち抜いたというのは嘘で、「馬鹿野郎、それがわかんないから不安なんだよ」と言う言葉を飲み込み、「来るといいなあ」と差し障りのない返答をするが、内心は「本当だよ、来る人いるんだろうなあ」ともし、今、この瞬間、百貨店から連絡があったら、「やっぱり止めましょう」と言いたいぐらいだった。

それでも単純におもちゃの梱包作業は楽しく、そのおもちゃを手にした時の物語がフラッシュバックする。

このおもちゃはあの街で手に入れたんだ、ヤノさんと二人宝探しの旅をしていた三島のおもちゃ屋だったなあ、と……

つい手を止めて感慨にふけているとアルバイトが無慈悲に「北原さん、手が止まっていますよ、もうすぐ最終電車の時間スから、僕もう上がります」と能天気と話しかけている。

まあ、この狭い倉庫での作業には彼のような能天気さは救いだった。

1983

ヤノはレコードジャケット専門のデザイン会社を設立し、紛れなく一^{いっこく}国一^{いちじょう}城の主^{あるじ}になった。

ヤノは正直、好きなデザインができれば幸せなほうだ。

しかし会社はそうも言ってもらえない。

利益を上げて、税金を払い、社員に給料を支払って行かなくてはならない。

月末が近づくと、スタッフのオジマがヤノのそばに近寄ってきて、毎回同じことを伝える。

「社長！今月また赤字ですよ、このままだと私に給料払ったら、家賃払えません」
家賃とスタッフの給料……

どっちを先に払うか？オジマの言い方は微妙だ。

ヤノは仕事に集中したように、デスクに向かい、オジマの言葉を聞こえないふりをした。

アイドルブームが到来してレコード業界は潤っている。

今までなら脚光を浴びなかった作曲家や作詞家もヒーローになれる時代だ。

羨ましくないとさえ嘘になる。

なんで俺にはビッグな仕事来ないんだ。

ヤノにはつい愚痴がでる。

「社長！事務所の家賃が高いんですよ、原宿なんかに構えるから……」

「デザイナーのオフィスは原宿に決まってるんだ！ふざけるな、それが不満なら今すぐ辞めていただいて結構毛だらけ！」

スタッフのオジマは「わかりました、辞めさせていただきます」と事務所から飛び出して行った。というのは全く嘘で「そうだよね、どうして原宿に借りちゃったんだろう、一に反省、二に反省、三四がなくて、五に反省します」と思いっきり反省した素振りをしてオジマに媚びた。

「もう、社長ったら、いつもそう言ってはぐらかしてばかりいて、もう！」とヤノとの会話は時間の無駄とばかりに仕事に戻った。

確かに追い詰められている。

ヤノは知り合いのアンティークショップにコレクションを売る算段を始めた。

ついに……おもちゃの棚に手をつけなくちゃならないな。

ヤノはこれまで売らずに耐えてきたコレクションの棚を羨ましそうに眺めた。

ヤノはタカイを先に返して今日も一人事務所でデスクに向かっていた。

ヤバイな……

スタッフを帰しても何も解決しない、いくら2人の会社とはいえ、ボクも経営者だ、甘いことを考えてもしょうがない。

実際のところ、今月も家賃払ってなんだかんだで、タカイに払う給料もギリギリだ。

ヤノはコレクションを売ることを決断し、知り合いのアンティークショップの主人に電話を入れた。

相手はすぐに電話に出た。

今日これからだけど、店に行ってもいい？

近所のアンティークショップは結構繁盛している。

仕入れても仕入れても、買手が後と絶たないらしい。

実際ヤノの声を聞くと電話の先の主人は「いいよ、待ってるから、何時でも」と言ってお上機嫌だった。彼の声は金満のビブラートがかかっているように聞こえた。

ヤノは受話器を置いて、店に売りに行くおもちゃを薄紙に包む。

これはキタハラさんと一緒に旅をして三島で発見したおもちゃだ。

これを売ったらキタハラさん怒るかな、その時の様子がまざまざと浮かんだ……

どっちが先におもちゃを発見しても、公平に順番でおもちゃを分け合ったんだった。

分け合う方法はまちまち、“じゃんけん”だったり、“インベーダーゲーム”だったり

と、そんなことを思い出したら、ヤノは包むのを一瞬躊躇^{ためら}った。

しかし、背に腹は変えられない。

気を取りなおし、丁寧におもちゃを一つずつ、包んだ。

包んだ数点のコレクションをしっかりと厚箱のケースに入れ、ヤノは事務所の電気を切った。

扉を出る際、もう一度、抜けたコレクションのあった棚を眺めた。

そのおもちゃがなくなったところだけ、なぜか光が当たっているように感じられた。キタハラさんが初めてボクのアパートを訪ねてくれて、暗い部屋の電気をつけておもちゃを見てもらった時のことをなぜか思い出す。

あの時のキタハラさんには驚いたなあ……

あんなにボクのしたことに感動してくれたのは後にも先にもキタハラさんだけだった。あの日を境に、二人はおもちゃ探しの旅に出たんだ。

それにしても、キタハラさんは熱しやすく冷めにくいから、ヤノはなんだかそんなキタハラのことを思い出す。

あれからずっとキタハラさんはおもちゃの^{とりこ}虜になり、今では自分のコレクションで展覧会を開けるまでになってしまった。

出会ってすごいな……

ヤノは一人おもちゃの入った紙袋を抱え、知り合いのアンティークショップへの道を急いだ。

表参道のヤノの事務所から歩いて10数分の場所にその店があった。狭い間口の店に入ると店主はヤノの来店に笑顔を見せた。

広いとは決して言えない店内にはレトロトイがガラスケースいっぱいに並んでいる。

“アンティーク”という表現と一線を引くために店のオーナーはあえて「レトロトイ」という言い方を好んでいる。

「ヤノさんが来るなんて珍しいね。事務所が近所のわりにはさ、おもちゃ売る気になった？」

挨拶代わりの店主の言葉にヤノはドキッとする。

店主ともう一人見慣れる男がカウンター越しにいた。

彼、造型師なんだ、こちらはヤノさん……

しんしんきえい
新進気鋭のデザイナーだよ、ね、ヤノさん

造型師？

「いやいや、確かにデザイナーであるのは間違いないけど、気鋭じゃないかな、結構年も食っているし……」

ヤノは苦笑いで答える。

店主に造型師について聞きたいと思い、紹介された男に向かい合った。

「初めまして、ヤノともうします……」

男はヤノを一瞥して、「ウス」と目を合わせずに答えた。

造型師と正面から向かい合うと、できれば関わりたくないようなタイプだった。

肩まで伸びっぱなしになった髪はきっと生まれてから一度も櫛くしでとかしたことがないか、床屋でパーマをかけて失敗したかどちらかだ。

さらにアルチュー（アルコール中毒）なのだろうか？

右手の指先が小刻みに震えているように見える。

ヤノの視線が彼の手元に向かったことで店主が反応した。

ああ、ヤノさん、彼はアルチューじゃないよ、ほら造型師って粘土みたいなもので形を作っていくんだ、だから無意識に指先で粘土をこねちゃっているんだよ、と店主に言われ、造型師の手元を見たが、その粘土はなかった。

無意識に粘土をこねる感覚もすごいが、それ以上にヤノを驚かしたのは「そもそも何を造型しているんだ」と言うことだ。

造型師は挨拶の「ウス」以外一切の言葉を発しない。

そのかわりに店主が話した。

今はさ、レトロトイも在庫が豊富なんだけど、やっぱり、年々売りに来るおもちゃは減っているんだよ……

ヤノはかつてキタハラさんと宝探しと称しておもちゃ屋を巡っていたことを思い出した。

ヤノさんたちは第2世代だよね。そして純粋におもちゃが好きでハンティングしていたけど、まあ、大抵は商売目当てというか、古いおもちゃが「金」にしか見えない人が大勢いたんだ。彼らが古いおもちゃの価格を一気に高騰させてさ、まあ、そんな輩からおもちゃ買っていたからボクもおなじ穴のムジナだけど……

そう言って店主は笑った。

彼の話のを要約すると造型師にこれからおもちゃの原型を作らせるとのことだった。それは古いおもちゃは結局今生産しているものでないため、供給は近い将来間違いなく、なくなっていくので、今から次の商品になるものを企画しているとのことだった。

先のことか？

ヤノは好きなデザインの仕事をしている。

しかし、あまり将来のことを考えていないというか？目の前の仕事をこなすことに追われているだけだ。将来と云うより月末の支払いのことを考えるだけの毎日だ。

年齢もあまりかわらない、この店の主人は店を流行らせているだけでなく、次の時代のことを考えて、手を打っていることに焦りを通り越して、嫉妬すら感じてしまう。

そういえば、ヤノさん、なんか、用事があったんだよね、わざわざ来てくれるなんて、その紙袋、もしかしてヤノさんのコレクション？

売る気になった？

造型師は店主の“コレクション”と云う言葉にビクッと頬の筋肉が反応した。

「何か？売るのがか……」

造型師は言葉を発した。

ヤノは言葉を発した造型師をもう一度マジマジと見る。

無表情だった彼の口元に笑みが浮かんだ。

ヤノは迷いを振り払ったかのように店主に言葉を返した。

「いやいや、コレクションなんかじゃないよ、家にあった食器を実家に持っていくところ、なんかさ、久しぶりにおもちゃをここで買っていたことを思い出しちゃってね、ごめんね、ひやかしに来たみたいで」

ヤノは咄嗟^{とっさ}に場を繕^{つくろ}った。

「コレクションなんかじゃないよ」というヤノの言葉に造型師の表情は能面に戻り、再び、指先はせわしくそこには存在しない粘土をこね始めたかのように動き始めた。

「まあ、売らなくなったらいつでも声かけてよ、スペシャルプライスで高価買取するよ」

そう言って店主は笑った。

ヤノはしばらくの時間、旧知の店で過ごした後、別れを告げ通りに出た。

やっぱり、売れないよな、キタハラさんとの宝探しをした思い出が詰まっているもん
な……

ヤノはギリギリのところでおもちゃを売るのを思い留まった。

その時、ヤノの脳天に閃きが突き刺さった。

そうだ！どうせなら、キタハラさんに買ってもらおう

これは名案だ、そうすれば、今月の家賃もスタッフの給料も、どうにかなるぞ！

キタハラさんに買ってもらおう

キタハラさんに買ってもらおう

キタハラさんに買ってもらおう

とヤノは事務所まで帰る途中、呪文もように唱えてウキウキしながら夜道を急いだ。

大型の台風が上陸して日本を横断している最中に、原宿の CAT ST. END に龍神が潜むと伝えられる「ピンクドラゴン（龍之紅粉）がオープンした。

エキゾチックなネオン管が輝きを放つ、ロックン・ロールが店内に鳴り響く、入り口にそびえ立つ柱の上には黄金の球体が怪しく光る、それはまるで祭殿^{さいでん}を彷彿させていた。

本場アメリカにもない、アメリカンドリームがここ原宿に誕生していた。その建物の上の空はすっかり日が落ち、暗闇を作る、その暗闇がさらに祭殿を際立たせていた。そこから歩いて数分の場所にヤノは念願の個人事務所を設立していた。

ピンクドラゴンは開店から数日経っても、長い行列は変わらない盛況ぶりだった。ヤノもそこが原宿で伝説を作った山崎眞行さんの店だということは知っていた、それはヤノが憧れる矢沢永吉さんも山崎が作った店に通っていたからだ。

山崎眞行のサクセスストーリーは当時の原宿ではすでに伝説になっていた。

怪人二十面相という店にドクロ旗をかがげ、彼が生み出す物語に若者が狂喜乱舞し、店に訪れ、山崎は巨万の富を手にしていた。その後、英国からきたスーパーモデルと出会い、世界を旅した。その旅を物語にした店をシンガポールナイトという名前にしてオープンし、山崎は店に物語をつけた、そんな店は東京中、探しても一軒もなかった。山崎はどんなに富を手に入れても、彼女と出会ったことが人生にとっての大事件だったとそののちに書いている。

その山崎がプール付きのビルを東京の中心地につくったのがこのピンクドラゴンであり、彼の成功は単なる巨万の富に終わらず、カルチャーになり、原宿の名もなき道に名前を与えていた。

ヤノはその原宿に初めての事務所を構えた。原宿には何かわからないが人を惹きつける磁力があったからだ。その磁力をヤノは感じていたし、その磁力がヤノにチャンスをもたらしてくれるような気がした。

今日はヤノが開いた事務所に昔の仲間が訪ねてくれていた。

まだ食えない状況に変わりはないが、それでも一国一城の^{あるじ}主人になったヤノを昔からの仲間が持ち寄りでささやかなパーティーを開いてくれていた。

ヤノは飲めない酒に気持ちだけが酔っていた。

事務所にはヤノの作品の他に趣味であるギターが飾ってある。

ギターは東京に出てきて、就職したレコード会社の初任給で買った。

現金で買えずに、10回払いで分割した、まだマルイのできる前の話だ。

毎月、給料が出ると買った楽器屋に分割した金額を収めに行く、やっと全部払い終えた時、これでやっと自分のギターだと思えた。その夜は夜通し、弾き続け、翌日寝坊して会社に遅刻して先輩に大目玉を喰らったのを今でもよく思い出す。

ヤノはそのギターを眺めるたびに故郷での文化祭のあの日を思い出すし、ギターの弦を弾くと、矢沢永吉がギターを片手に故郷を後にしたサクセスストーリーに想いを馳せることができた。

ギターはヤノにとってタイムマシンのような存在だった。

「ヤノさん」

肩を叩かれ後ろを振り返るとそこには親友のキタハラが立っていた。

「あっ、キタハラさん、来てくれたんだ！」

「そりゃ来るよ、ヤノさんの事務所開きだもの」

「いやいや、事務所開きなんて、華々しいもんじゃないよ、昔の仲間が仕事のないボクをなんとか応援しようとしてくれたんだ、感謝するけど、まだまだ食えないなんて正直情けないよ」

「何言ってるの、ヤノさん、これからだって、これからだよ、だってボクたち、まだ若造だろ、ここからスタートだよ！」

そう言いながらも、スタートを切ったヤノとまだスタートらしいものを全く切れないでいる自分との差が開いたと感じた。

「いい名前だね、ビタミンスタジオって」

「ありがとう！ビタミンスタジオって、いつか自分が独立したら屋号にしようと決めていたんだ」

ヤノはそう言って、vitamin studio とロゴの入った着ているTEEシャツを誇らしげに、胸を張ってキタハラに見せた。

「すごいな、ヤノさん、オリジナルのTシャツじゃない？」キタハラは^{まばゆ}眩しい眼差しでヤノが着るTシャツを眺めた。

キタハラが学生時代に通った青山学院の裏門に開店したボートハウスにはここ数年、長い行列ができるようになっていたし、いちばんすごいときには3,000人ぐらい並んでいて社会現象にもなっていた。

それを横目で見ると自分に自分でも何かできそうだと思ったが、想像はしても、行動を起こすには至っていない。そんな焦燥感に似た気持ちを横目に、ヤノさんは着実に夢の実現に向かってるように映る。

キタハラさん、ピンクドラゴン……行った？

キタハラはその質問に一瞬戸惑う、

ピンクドラゴン？

来る途中、人だかりができていたあの奇抜な建物だろうか？

キタハラはそのヤノの質問に答える。

なんか、小さなホテルかと思ったけど、それがその……ピンクなんとか、かな？



「そうそう、それだよ、原宿の観光名所ができたって感じで毎日行列を作った若者たちが日本中からピンクドラゴンに買い物に来ているんだ。ほらクリームソーダを作った山崎さんの新しい店だよ」

もちろんキタハラも山崎さんのことは知っていた。70年代末には1日1千万という

驚異的売り上げを記録していたことで時代の寵児^{ちょうじ}になったが、その姿をマスコミの前にはあまり見せることはなく、その表に出ない、露出しないことが彼を生きる伝説にさせていた。

その山崎さんが作った新しい店がピンクドラゴンか！

原宿はかつてキタハラが青学に通った頃とは全く変貌を遂げていた。

日本中のクリエイターが流れてきて、アパレル、ファッション、一山当てようとする若い才能が溢れていた。

それはまるでサンフランシスコのゴールドラッシュに押し寄せた時代を彷彿させているかのようだった。

吉田拓郎が「ペニーレーンでバーボンを」と歌ったフォークソングの時代はすでに

終焉^{しゅうえん}していたが、そのフォークソングを歌った若者に変わり、ロカビリーに身を躍らせ、ロックン・ロールをシャウトし青春を燃えつくそうとするロッカーが街で熱いハートを燃焼させていた。

そんな現象を大人たちは不良と決めつけて排除しようとしたが、若者たちの熱は冷めることなく、原宿に大きなカルチャーを誕生させ、その中心に山崎はいたのだった。ヤノはその山崎のいる側の世界へ走る列車に乗り込もうとしていた。

矢沢永吉の唄う“切符のいらない、不思議な列車に乗り込み、夢のレール”を走る瞬間にキタハラには立ち会おうとしているような感じがした。

ヤノはその話をすると笑顔で仲間の輪に戻り、満面の笑みをうかべている。

みんなヤノの肩を叩き、励ましている。

ヤノは自身を「貧乏でまだ芽が出てない」と嘆くがこの仲間がいれば、ヤノの努力が花ひらく日もそう遠くはないはずだ。

ヤノさん……一緒にサクセスしよう！

ヤノの背中にそうメッセージを送り、キタハラはヤノの事務所を後にした。

混雑する表通りを避け、裏道をミニエースですり抜けて帰り道を急ぐ。

そこで異様な光景を目にした。

人が延々と長い列を作っている。

瞬間ボートハウスかと思ったが、さすがに青山からここまでの行列はないと思い直す。

昨年、青山に第１号店がオープンしたアイスクリーム屋の日本第１号店が開店した際には、長い行列ができたことが話題となったが、後からその列は広告代理店の仕込みだったことが判明すると行列はメディアが作るものとなってしまった。

なんかまたアイスクリーム屋でも出来たかな？と冷静に考えたが、キタハラ的好奇心が行列の正体を確かめないでここを素通りすることを拒絶した。

ハザードを点滅させ、クルマを道の脇に止め、行列の先を目指した。

もう一つキタハラをその気にさせたのは行列に並ぶ人のファッションだった。

50s（フィフティーズ）全開の若い子たちやロッカーバリバリのリーゼントを決めた一見不良たちが行儀よく整列していたからだ。

映画アメリカングラフティの中から出てきたような男のコと女のコたちがその行列を作っていた。

早足で行列の先に到着すると「龍之紅粉」と輝くネオン管が光り輝いていた。

これが、あのヤノさんが言っていた店か！

これがあのピンクドラゴン！

キタハラをヤノさんが原宿に観光名所が出来たと話していたのを思い出した。

中に入りたいと思ったがこの行列では何分待たされるか、わからない。

キタハラは建物の屋上に視線を向けた。

都会では珍しいぐらいはっきりした夜の虹がピンクドラゴンの上空を覆っている

虹は、^{ドラゴン}龍の化身……

虹は、中国の古い言い伝えでは龍の一種と考えられていたというのを聞いたことがある。

それは「虹」という文字は、虹を、空にかかる大蛇に見たててできた文字らしく、中国では、^{りゅうこう}龍虹と呼ぶ地域もあるらしい……

行列の横では店の前をスタッフらしい 50s ファッションに身を包んだ若者が掃除している。キタハラは掃除をするスタッフが皆笑いながら清掃をしているのを不思議な光景だと思いながら眺めた。きっと皆、忙しい 1 日の終わりで疲れているはずだ、しかし誰一人、疲れた顔をするものはいないし、皆、笑いながら店の前を掃き、またあるものは空き缶を拾ったり、ゴミの袋にせっせと周辺のゴミを集めている。

山崎はもちろん億万長者だろう、しかし金なんてなくなっても、自分のスタイルに誇りを持って生きていけば、人生は輝くのかもしれない。その夢を山崎は若い奴らに与えているように見える……

その若者の笑顔は何か明るい未来を想像させた。

未来に夢があると人はこんな笑顔になれるんだ、キタハラはそう思った。ボートハウス、ピンクドラゴン……

そしてヤノさんのビタミンスタジオ、何か自分にもできる気がする。

キタハラは自分の価値観が急速に変化していくのを感じていた。

ヤノさんは言っていたな……この建物の屋上にはプールがあるらしい。

そう思ってキタハラはもう一度、ピンクドラゴンの屋上を見上げる。もちろんここからは屋上のプールは見えることはない。

なんでも、そのプールは住人のためでなく^{ドラゴン まつ}龍を祀るものとして作ったプールだそう
だ。

もちろん、龍が実際に住んでいるわけではない、しかし人々はその物語に惹かれるの
だ。

山崎の作ったのはファッションであってファッションでない、そう彼は物語を作り、それをカルチャーに昇華させようとしている。

まるでロックン・ロールそのものだ。キタハラの中でロックン・ロールが鳴り響く。その五線譜の旋律がやがて、歌になり、物語になり、人々を魅了していくんだ。

キタハラは自分の物語は何か？と考えを巡らせた。

この町では不良少年も、皆、誰もが“自分の人生の主人公”になれる。

ドクロの旗は大海原をいく羅針盤だし、ブラックジーンズと黒いシャツはまるで海賊のユニフォームだ。

キタハラはいつか自分のミュージアムを持った日には、オリジナルのウェアを作ろうと決めた。

ミュージアムをオープンするには？

その先を考える。

いくら想像しても、結局は行動しかない。

独立

独立か……

実家を離れ……

そうだ、ボクも独立しなければ先には進めないな。

キタハラは初めて独立という言葉が胸の中でしっかり意識した。

「独立して自分のミュージアムを持つ」

それがどんな大それた想像であっても構わない。

その夢をそっと口に出してみる。

「ミュージアムを作る」そのたった一言だけ発声した夢だけで、キタハラが望むサクセスストーリーが誕生したような気がした。

それから数日して、キタハラがヤノの背中に投げかけた「サクセス」という文字が現実になることをキタハラがヤノにもたらすことになる。

今、ヤノは自分がこうして生きていられるのは家族のおかげであると感謝して毎日
を過ごせている。

日々、手をあわせることは叶わぬが、心の中で手を合わせ、妻と二人の娘に感謝して
家族の未来に想いを馳^{はせ}せる。

病気が進行したのち、声が出なくなり、手や指が動かなくなっても、眼球の運動に必
要な筋肉は侵されにくいので、目の動きで自分の意思を伝えることができる。

ヤノは前向きに生きようと決めたが、この目の動きで意思を伝えることがからだの不
自由さを凌^{りょうが}駕するほどの苦しみを持つことを知る。

「喉が渴いた」

「腹が空いた」

「トイレに行きたい」から始まって、全ての行動を相手に伝えなければ何一つ行動が
起こせないストレスは「指先が痺れた、足が動かなくなった」という苦しみの比では
なかった。

病気の全てを受け入れた後でも、この意思の疎通ができないという苦しみはヤノの精
神を蝕^{むしば}んだ。

「瞬きワープロ」と呼ばれる透明のボードを使って介護者とまぶたと眼球の動きだけ
で意思表示していく訓練は、まさに絶望への扉を開けた日々の始まりだった。

何度も「喉が渴いた」と意思表示を示しても、眼球の動きが介護者と疎通できない、それが数回、数十回、時には1時間もかかって、一つの言葉が相手に理解される苦痛はこの先、己の生きている価値を失わさせていった。

ヤノの脳裏にはいつしか「自殺」という言葉が浮かんでいた。
どうやったら死ねるのだろう、己の体の中で唯一動く、回転する脳でそのことばかりを空想した。

死にたい……

死にたい……

死にたい……

毒薬を飲む、弛緩剤しかんざいを投与する、壁に頭を打ち付ける、身投げする、首を吊る……

溺死、水死、焼死、想像する言葉の全てが「死」を連想させるものだった。

いつしか“死”はヤノにとって甘美かんびな空想になっていた。

“死”のことを想像する時だけが、前向きに思考が働き、動かない手を自分の喉にかけて、締め付ける行為に酔いしれた。

しかし、その死さえ、できないことに気づく。

毒薬を飲むにも自分では飲むこともできない。ましては“身投げ”なんて想像するだけで笑い過ぎて涙が溢れた。

まさか、介護士に「すいません、ボクを抱えて、鉄橋から放り投げてください」と頼むとでもいうのか……

あっとう間に介護士は殺人罪で逮捕、牢屋……監獄行き。

ボクは自分で死ぬこともできない。これが冷徹な答えだった。

死ねないんだ……

その自殺できない鬱憤^{うっぷん}は介護士への暴言になっていった。

ヤノは幾度となく「もう殺してくれ」と介護士に暴言を投げかけた。

いや……

ヤノは暴言も吐けない。

つまり、「もう殺してくれ」とボードに伝えて、メッセージを送ることではか、介護士には意思疎通ができない。

介護士はきっと「もう殺してくれ」というメッセージを理解していたはずだ。

しかし、理解しないフリをして、何度も「わかりません、ちゃんとメッセージボードにヤノさんの目で言葉を伝えてください」と繰り返した。

ヤノは目から血が滲むのではないかと、と思うほど、「殺してくれ」とメッセージを繰り返した。

その様子を妻であるタカコは隣の部屋で聞き耳を立てて、一人泣いていた。

嗚咽が聞こえないようにハンカチを歯で噛んでいるが、そのハンカチは訓練の度に噛み過ぎて、ボロボロになっていた。

何度も扉を開けて、「もう止めて」と言おうとドアノブに手をかけた、しかし介護士からは訓練中は何があっても、部屋には入ってこないようにキツく言い渡されていた。

タカコにはヤノが「殺してくれ」と言葉にならないメッセージを送っているのがわかっていていた。

介護士はヤノの怒りをテコにこのメッセージの伝達をヤノの教え込もうとしている。

わかっていても辛く、訓練中は常に隣の部屋でヤノの苦しみを共にしている。

最愛の人が「殺してくれ」という言葉を発している時、私は何ができるのだろう？
もしかしたら、本人の望むように殺してあげることが一番の愛なのかもしれない、そんな悪魔の囁き^{ささやき}を何度も聞いた。

私が彼を殺せば、例えその「行為」が「殺人」に問われようとも後悔は微塵^{みじん}もない、そんな風に思っていた。

彼を殺して、残りの人生は刑務所で送る、それが私にできること……

本当に死ぬなら、その時は私が自分の手で首を絞めてあげる。
だから、今は耐えてちょうだい！

泣いても泣いても涙は枯れなかった。

タカコはトレーニングが終わるまでに腫^はらした目を元に戻さなければならないとバスルームに向かった。

介護士は今日も「殺してくれ」というメッセージには一切反応せず、辛抱強く、「ゆっくりやりましょう」とだけ、言葉を発し、一言も反論せずにヤノとのコンタクトの訓練を共にした。

ヤノも相変わらずその介護士と過ごす時間の中で何度も絶望し、涙を流したが、その涙はいつか乾くことを知った。

「殺してくれ」というメッセージが伝わらないので別の言葉を伝える。

「もうつかれた」

そのようなメッセージを送ると介護士は「休みましょう」と言葉を返してきた。

そしてまた「殺してくれ」とメッセージすると相変わらず何も答えない。

何度も、何度も「殺してくれ」とボードに伝えることでヤノの目はいつしかボードに意思を伝えることができるようになりつつあった。

その意思が伝わり出した頃、ヤノの涙も乾くことを知ったことで、ヤノの中で何かが変わっていった。

幾度と流れる涙もいつしか乾く、また感動して流れるのも涙だ。

なぜ……感動する涙も、絶望の涙も同じ涙なはずなのに……こうも感情が異なるのだろう。

同じ涙なのに、なぜ、心に違いがあるのだろう……

ヤノは自分の流す涙を通じて自分自身と向き合い始めていた。

ヤノはいつしか全てを受け入れようとしていた。

体が動かないことも……

意思がうまく伝わらないことも……

しかし、その不自由を受け入れた後も最後に残った感情が「自分が身勝手な最低な人間になる」ことへの恐れだった。

ヤノは自分が別の人間になったような気がして狂いそうになる。

どんなに否定しても、ヤノは自分が変わってしまった、心が汚れてしまった感じがしてならなかった。

死ねないことをはっきり理解した次は、世の中の全てを否定し、恨^{うらん}んだ。

悪いのは自分じゃない、
なぜ、ボクだけがこんな目にあうんだ。

ひど
酷いじゃないか！

心では前向きに生きようとする気持ちが芽生えた、しかし前向きに生きようとすれば
するほど、自分の運命を呪う焦^{のろ}燥^{しょうそうかん}感が押し寄せた。

未来のことを想像すればするほど、大きな黒い塊がヤノを押し潰そうとした。
前向きと言ったって、ボクにどんな未来があると言うんだ……

未来がなんだ！

前向きって一体なんだ！

人は軽々しく未来を語る、こんな風になりたい、成功したい、メジャーリーグに行きたい。

ボクの未来は……
ボクだけには未来ない。

暗い暗い、抜けることのできない真っ暗なトンネルのような未来、
未来のことは今後一切、考えたり、何かを願ったり、するのはやめよう。
しかし、考えないようにすればするほど、ヤノの中で「未来」が一番の関心事になった。

いつまで生きられる……
二人の娘の未来は……

そして最愛の妻はボクがいなくなれば新しい未来が開ける。そんな屈折したことを想像している毎日だった。

少しずつだがボードを使っの会話ができるようになった時、ヤノは介護士に質問をした。

「ぼくのみらいはどんなみらいでしょう」

介護士は微笑んだ。

「未来ですか？」

ヤノは「はい」と伝える。

「ヤノさん、いつの間にか、メッセージボードを使うのが上達しましたね」

そう言って彼は笑った。

「せんせいがずるい」

ヤノは伝える

「ずるいですか？」 介護士がヤノに伝える

ヤノはゆっくりだが、正確に「ボクの殺してくれを無視した」とメッセージして、□元に微笑みを浮かべた。

「なんのことでしょう？」

介護士も微笑んだ。

「さあ、トレーニングの第一段階は今日で終了です。

よくここまで頑張りましたね」

ヤノさんの前向きな気持ちに感服しました。

ヤノはすかさず「まえむきになれない」と正直な胸のうちをメッセージした。

介護士は^{うなず}頷く。

ヤノに断りを入れ、介護士は席を外した。

介護士が扉を静かにノックし、ドアノブをゆっくりと廻し、扉を引いた。
そこにはヤノの妻が立っていた。

奥さんはヤノさんが戦っている間、一緒に扉の向こう側で戦っていました。
タカコはゆっくりと部屋に入ってきた。

「さあ、久しぶりに夫婦の会話をしましょう、そしてゆっくりと未来について話し合
いましょう」

そう言うと介護士はボードの前に座り、奥さんにヤノの隣の椅子に座るように ^{うなが}促し
た。

「ヤノさん、奥さんに久しぶりの挨拶をどうぞ」
そう言ってヤノが気持ちを伝えるのを待つ。
「ヤノさんは頑張りました。すでに会話ボードを使えるレベルまでになりました。さ
あ、奥さんからどうぞ、ご主人に ^{ねぎら}労いの言葉をかけてください。」

「元気？」タカコはゆっくりと話す。

ヤノは目を動かす。

「げんきだよ」その目線を追う介護士が言葉を口にする。

タカコの目が涙で溢れた。

ヤノの目からも涙が溢れる。

タカコは新しいハンカチを出して、ヤノの目元に添える。

涙を拭き終わるとヤノは再びメッセージを伝える

「ありがとう」

「今日のトレーニングは終わっています。ヤノさん、今日はとことん会話を楽しみましょう」

そう言って、介護士は持参したポットからお茶を注いで「一人で勝手にすいません」とお茶を飲むことでリラックスした姿勢をヤノの前で示した。

「今日はヤノさんの未来についてゆっくり話したいと思います。奥さんもそのつもり……」

「未来ですか？」タカコはその言葉を理解し、頷いた。

タカコはいつかこの問題には向かい合わなくてはならない時が来ると思っていた。

主人の未来は私たち家族の未来……

あなたは、もしかして、未来はないと思っているのね？

そう語りかける。

「そう」

ヤノはメッセージを伝える。

「どうして？」タカコは^{たず}尋ねる。

「かぞくのおもに」ヤノの目が動く。

「重荷？」

タカコは涙が枯れ、流す涙は残っていないと思っている。

しかしヤノの「重荷」という言葉には枯れきった涙が再び、沸き上がってくるような感じを覚える。

「そうか……重荷に思っていたんだ……そうだとしたら、今日はあなたに怒らないといけない」そう言って少し怒った表情を見せる。

私も二人の娘も一度もあなたのことを重荷に感じたことなんて一度も、微塵^{みじん}もない。
これははっきり言える。

もしあなたが勝手に自分の存在を重荷だと思っていたならそれは失礼な話……」

介護士は二人の会話をただ眺めている。

ヤノの目は少し戸惑っているように見える。

タカコはゆっくりとだが、しっかりとこう言った

「いつかはみんな知るのよ」

その言葉にヤノの心が反応した。

涙で曇った目に明かりのような光が見えた瞬間だった。

ヤノが何か感じるまで妻は次の言葉を発しない。

ヤノは恐る恐る妻に尋ねる。

「なにを？」

その時だった。ボードも使っていない、介護士もそのヤノに視線を追うこともせずに
タカコはその「何を？」という言葉でヤノの目の動きで理解した。

心の波動が言葉を超えて、二人をつないだ瞬間だった。

ヤノはもう一度、タカコに心の中で呟いた。

何を？

タカコはヤノの動かなくなった手をさすりながら話す。

未来より過去の時間が多くなったことを皆、知るの……

それはあなただけでは、私も、誰もがそう、

タカコはヤノが発しない言葉にならない波動に答える。

ヤノはメッセージボードでない言葉で、心でも会話ができることを知った。
介護士は席を立て、そっと部屋を出た。

それはボクに対しての慰め？

タカコは答える

違うわ……

なら、救済かな……

ヤノの目はいつしか力強い光が宿っている。

「ボクは変わってしまった」ヤノが伝える。

タカコは答える

「いいえ、あなたは変わっていない、出会った頃のまま……」

心が汚れた気がするんだよ……

「いいえ、あなたの心は美しい、とってもピュアよ」

ピュア、本当？

目の前にいるタカコはヤノの眼差しの奥にある光を見ている、そして答えた

「嘘を言ってもしょうがないじゃない」

微笑みながら言葉を付け足す、

「何年一緒にいると思っているの？」

今度はヤノが微笑んだ。

結婚した頃、二人でこうして夜通し、話し合ったわね。

未来のこと、あなたの仕事への夢、そして、生まれてくる子供のこと……

ヤノも思い出す。

ボクはわがままな夫だったね……

好きなことだけ、夢を追いかけて、自分の生きたいように生きてきた。

ヤノは魂の会話を楽しみ始めていた。

それがあなたなの、そんなあなたが好きで一緒になった……

告白しようかしら……

告白……何を告白してくれるの？

あなたが、今の病気になって、もちろん、私も苦しかった、けどもっと恐れたのは
「あなたが別人になること」だった。

私にはそれが心底怖かった。

怖かった？

そう、あなたはきっと絶望から立ち直ると信じていたから……それは1ミリも疑って
いなかった。

1ミリも？

そう、1ミリも……

私の信じたとおりあなたは絶望から這い上がって、そして私と二人の娘を愛してくれ
ている。

でも這い上がっただけでなく、再び、夢を私たちに与えてくれた……

夢、どんな夢を与えたんだろう、ボクが夢を……なんだろう？

それはあなたが、そのあなたが悪魔と呼んだ病気から完治するまで生きるという夢！

ヤノの目が再び涙で曇った。

ボクが、夢を与えることができたの？

そう、あなたのいないところで私は二人の娘とその夢を話すの……

時には美味しいワインの飲みながら……

ずるい……

ヤノは声にならない^{おえっ}嗚咽をする。

あなた、今、“ずるい”って思ったでしょ……

そうだよ、ずるい……ヤノは涙で答える

「あなたが生きている間にあなたを治す治療が見つかることが私の夢」

そして、あなたは変わらない、いいえ、あなたは変わらなかった。

ボクは心底自分が変わったように思えたんだ。

「んん……あなたは変わらなかった」

涙でぐちゃぐちゃになったヤノの顔を何度も何度もハンカチで拭く。

「結局、人は変わらないのよ」

人は変わらない？

「変わらないわ……ただ、歳を重ねるだけ……」

“変わらない”

ヤノは今一番恐れていたことをタカコが話してくれたことに感動している。

ずっと心を覆っていた黒い雲が晴れていくような気持ちがした。

「人は順応していくの……」

順応する？ヤノは答える。

二人の間には幸せな時間が流れている。

そう、日々の喜びを知り、満ち足りていく、私は毎日、心から満ち足りているわ。

家族や家庭、あなたとの暮らしに、娘達の成長する姿に満ち足りている……

私は今、幸せなの……

あなたは十分苦しんだ、だから、もう苦しむのはやめにして……

あなたの仕事は最上のものを求め続ける旅、それがあなたの人生を形成した、あなたは私たちにたくさんの愛情を注いでくれた。

もう、苦しまなくていい。

未来は今、こうしていること、家族が一つになっているだけ……

それ以上でも以下でもない。わたし達にとって未来は家族……

家族……を持つ、それだけで人の一生は素晴らしく輝くのよ！

そう言って、タカコはヤノの胸に顔を埋めて泣いた。

今日はもうとことん泣く！泣いてやる。

涙が枯れるまで……

大好きよ！愛している！マサユキ！

ヤノは解放された、全ての呪縛^{じゅばく}から魂が救済された。

ヤノのからだを縛り付けていたのは ALS だけでなかった。ヤノ自身の心の呪縛がヤノを締め付けていたことを今、知ったのだった。

「未来より過去の時間が多くなっただけ」のタカコが放った一言でヤノの魂は救済された。

ヤノはその日から前向きに生きることができた。

ある日の午後、ヤノは手にした受話器をそのまま落としそうになった。

知り合いのミュージシャンがヤザワさんに紹介するって言っているけどどうする？

そのミュージシャンの名前は NHK 紅白歌合戦に連続出場しているビッグネームだった。頭に血が上り、血管に一気に流れる血潮で毛穴が開いた。

キタハラが知り合いのミュージシャンを紹介し、そこから繋がった縁がヤノのサクセスの扉を開けようとしていた。

も、も、も、もちろん！ぜひお願いします。

しかし、というか？ボクはあまりそのビッグネームと親しくないですし、どうしてまた……」

電話先の相手は「キタハラさんの紹介だよ」そう言った。

ヤノはキタハラが周囲に「誰か、矢沢栄吉さんの知り合いがいない？」と言っていたのを知っていた。

キタハラさんは「出会いが全てだもんな、ボクはヤノさんと出会えたおかげで、こうしておもちゃを集めて、認められるようになれた、恩返ししなくちゃね」ことあるたびにヤノに感謝を伝えているが、まさか、キタハラさんがヤザワさんを……
一気に目頭が熱くなった。

ヤノが無口になると電話の相手は話を続けた「まあ、詳しい話はいいいじゃない、近々に会えるかな、事務所に来れる？」電話の主はそう言って住所を伝え、電話を切った。

今までも、何度も紹介すると言われたが、結局は紹介には至らなかった。

紹介者を責める理由は微塵もないが、それでも期待が大きいほど、落胆も大きい、だけど、今度はそのミュージシャンのビッグネーム度合いからも眉唾^{まゆつば}には思えない。同じ音楽業界から言えば、その人はすでに大御所の雰囲気すら臭っている。

それにしてもキタハラさんは、ボクのために、こんなに……

すぐに電話しようとしたが、キタハラさんの声を聞いたら、きっと泣いてしまう。

大きく深呼吸して、ヤノはまずしなければならないことを想像した。

まずは床屋だ、1年以上放置しっぱなしになっていた長い髪を整えなくちゃ、

次に、上京して、面談を受ける際に買ったジャケットを^{こうらぼ}甲羅干しにして、ナフタリン

の匂いを消す、^{みがけ}磨けるような革靴は一足も持っていなかったのでスニーカーをタライで洗い、物干しに吊るした。

ヤノが運命の電話を受けた時、キタハラも運命のダイヤルが振られようとしていた。

人の縁は不思議だ

自分の全く知らないところから運命は何かに導か

れ、ある日、芽を出す。

そして未来は創られていく。

広告業界では制作した自分の作品がその時々話題になっても、人の記憶からあ
っという間に消費されてしまう。

広告とは消費財なのであって作品とは言わないので当たり前のことかもしれない。

70年代から頭角を現していた鬼才のCMクリエイターは会社の中でのポジションが
上がるにつれ、現場とは離れていく、いわゆる管理職の道に足を踏み入れることにな
る。

無論、企業人である以上、出世は悪でない、甘い蜜を含んだ媚薬^{びやく}だ。

「現場が一番」などと、淡い感傷に慕っている場合ではない、世界最大の広告代理店
の中で自分の立ち位置を明確にすることに集中しなくてはならない、頭でわかってい
ても、どこか一抹の映像を作り続けたい誘惑が込み上がる。

時代は80年代になり音楽と映像をミックスさせたいいわゆるミュージックビデオの時
代になっていた。

新曲リリースの度に、テレビ番組に出演しなければならない事を疎ましく思い、演奏
シーンとイメージ映像を組み合わせた映像作品を自分たちで作り、テレビ局に送った
ビートルズがそのミュージックビデオの走りだと言われているし、かつてジョージ・
ハリスンが「ミュージックビデオは僕らの発明」とインタビューに答えたこともあ
る。

そしてついにミュージックビデオの金字塔が世界中に配信され、人々の度肝を抜い
た。

言わずと知れたポップス界のキング、マイケル・ジャクソンの「Thriller」だ。

通常1000万円程度がその制作費と言われているが、この「Thriller」には50万ドル
（当時の円レートで1億5000万円）が投入された。

最先端の映像技術と最高峰のクリエイターがマイケルのもとに集められ、そして惜し
みない資金が投入されたのだ。

映像の尺は13分34秒にも及び、ホラー映画仕立てになっていて、特殊メイクでゾン
ビになったマイケルが墓場から蘇ったゾンビたちを従えてダンスをするという画期的

で刺激的な映像を初めて見た際、小吉は同じクリエイターとして嫉妬を通り越した驚愕きょうがくを持って、脱帽したのを忘れられないでいた。

確か TV 番組『ベストヒット USA』にてフル尺で初公開され、マイケルの先進性やほとばしる才気、比類なきスター性、作品のインパクトとクオリティは日本列島を一気に駆け抜けて会社内だけでなく、どこに行っても、何のミーティングをしても話題の中心はマイケルだった。

小吉はウイスキーが売れない時代にそのブランドにおける最上位の高級酒を誰もが知る酒にしたコマーシャルを企画した。

1983 年からシリーズ化された世界の偉人シリーズの中で小吉はアルチュール・ランボーを主人公に選んだ。

前年、シルベスター・スタローンの出世作になった「ランボー」が封切りになり大ヒットになっていたので、小吉がアルチュール・ランボーを主人公にしたコマーシャルをその酒メーカーの広告部にプレゼンすると、「ギャラはいくらだと言われたので」「既に亡くなっているし、架空のドラマ仕立てなので、ランボーへのギャラはない」と答えた後に、周囲はランボー違いをしていたことを知るに至り、苦笑いしたものだ。

つまりそれほどアルチュール・ランボーを誰も知らなかったという後日談がある。そんな小吉の名を一躍有名にしたコマーシャルも、ブラウン管の中で流れてしまえば、消費され、消えていく。小吉はどこかもどかしい気持ちになっていた。

そんなタイミングでの「Thriller」との邂逅かいこうだった。

小吉はどこか心の奥底でブスブスと燃え残っている燃え滓にメラメラッと炎が揺れた感覚を覚えた。

その時から小吉は無意識に自分が撮影する対象を探し求めている。

そんなある日、何気なくテレビを眺めていたら流れてきたコマーシャルが気になった。大手家電メーカーがスポンサーになっていた映像では無数のロボットのおもちゃが動き回っていた。小吉自身、おもちゃのコレクターであり、お気に入りのブリキの

おもちゃを今でも机の上に飾っては時より手に取り眺めている。映像の中のおもちゃはまるで意思を持っているかのようなだった。

小吉はロボットに心を惹かれていた。

懐かしさ以上に未来をそのロボットに観た気がした。

団塊の世代生まれの彼にとって、おもちゃ屋で売られていたおもちゃはどこか高嶺^{たかね}の花であった記憶が大人になって蘇り、海外に出張に行った際に蚤の市で日本製のおもちゃを見つけては買っては一人悦にいていた。

ブリキのおもちゃか……

そうこうしてると、そんなおもちゃをコレクションしている人が何気に多いことを知る。

以前買った雑誌ポパイにもそんな記事が掲載されていたのを覚えている。

確か 1960 年代のアメリカンライフの特集だったように記憶して、その表紙が気になって保管しておいたのを思い出した。

小吉はリビングの片隅に積まれている雑誌の山から、目当てのタイトルを探した。探していた雑誌はすぐに見つかった。ブリキのポパイのおもちゃと一緒に

「1979 12/25、From 60's on、60 年代を知らなければ……」

とコピーは書かれていた。



小吉は“もしかしたら”と言う勘が働いた。

このCMのロボットのおもちゃは、

「キタハラくんのおもちゃかもしれない」

広告で流れていた家電のおもちゃはキタハラくんが所有するおもちゃのような気がしたのだ。

間違いない。

確信に変わった。

あれだけのロボットを持っているのはキタハラくんしかいないはずだ。

小吉は気持ちが高揚してくるのがわかった。

もちろん、以前から知らない仲ではない、歳も一緒ということで気が合い、一度食事をしたことがある。

そうだ！間違いない、あれはキタハラくんのおもちゃだ。

どうしよう、

いても立ってもいられない

今すぐに連絡したくなる。

まるで「好きな子に電話をしたい」そんなソワソワした気持ちになっている。

いきなり、食事でもしませんか？ではあまりに芸がない。

そうこうしていると寝酒にと思っていたグラスが空になっている。

レコードはいつしか終わり、ノイズだけになっていた。

レコードの針を外す。

レコードをセットして気持ちを落ち着かせる。

さすがに気持ちの高揚とウイスキーで少し酔ったかもしれない。

ここで電話してもいいけど、何か、足りない、小吉は「善は急がない」と決め、キタハラに連絡したい気持ちを抑えて、もう一杯グラスに酒を注いだ。

氷が溶けかかっていたのでオンザロックでなくなっていたが、そんなことは気にしないぐらい心地よく酔いが回ってきた。

その酔いが映像のイメージを増幅させる、酒に酔っているようであり、また自分が描きたい映像のイメージの酔いもあり、小吉はソファの上でいつしか眠りに落ちていた。

翌朝

小吉はオフィスのある銀座に着くと、部下にキタハラが掲載されている雑誌を集めさせた。

さすが、広告代理店の資料室だけあって、すぐに何冊もの資料が小吉の元に届けられた。

小吉はその雑誌のページをめくっていき、キタハラが答えているインタビューに読み入った。

およそ一人のコレクターのインタビューの数じゃないな……

キタハラが受けたインタビューは尋常じゃない数に及んでいた。

読み進むうちに小吉には核心となるキーワードが見つかったような気がした。

キタハラがなんども“ミュージアム”という言葉を使っていたからだ。

「いつか自分のコレクションを一堂に見せるミュージアムを作りたいんです」

その熱は紙面からも伝わってきた。

自分と同じ歳の人が「ミュージアムを作りたいと情熱的に語っている」

小吉は小さな驚きを感じた。

「小さな喫茶店をオープンしたい」、あたかもそんな感覚で彼はミュージアムを作りたいって言っている。

それでも、キタハラくんは大胆だな、自分のコレクションでミュージアムを作るか、小吉は正直おもわずのけぞりそうになる。

しかしその大胆さが小吉の心に刺さった。

普通はミュージアムなんて国か資産家が作るものだろう。

アメリカの金融資本家グッゲンハイムが作ったミュージアムはその有り余る資産があってこそニューヨークのランドマークともなることができ、フランク・ロイド・ライトに設計を依頼することができた。

それを個人であるコレクターが作ると言っている。

きっと、インタビューをする側も「できるわけない」と思いながらキタハラくんのインタビュー原稿を書いているのだろう。

小吉は想像しながら、どんどん痛快になっていた。

多少、ホラ吹きなのも彼の魅力の一つだが、ここまで大ボラを吹ければ、彼はもしかしたら、ミュージアムを本当に作るかもしれないな。

小吉は勝手にキタハラが作るミュージアムを想像する。

今までにないミュージアムになるような気がしてならない。

いや、間違いなく、誰もが作ったことのないミュージアムになる。

小吉は手帳に書いた記憶があるキタハラスポーツの電話番号を探していた。

面白いかもしれない、「キタハラくんはコレクションでミュージアムを作りたい」これだ！

小吉はページをめくり、電話番号を探しながら小躍りしたい気持ちになった。

小吉は一瞬で映像のイメージが固まった。

脚本ができたような気がした。

プロローグからエピローグまでが繋がり、頭の中で、すでにディテールまで浮かんでいる。

イメージなんだ、

そう、イメージさえ持てれば勝ちだ、しめたもの。

これは小吉がクリエイティビティを作品に与える際に不文律にしていることだ。

全てはイメージ。

いける！

ボクの映像作品はおもちゃだ。

そしてキタハラくんを口説く言葉も自然と浮かんだ。

小吉はデスクから電話をかける。

電話口に出たのが本人だと確認して、こう伝えた。

「キタハラくん、僕がミュージアムを作ってあげるよ」

知り合いの杉山小吉からの電話を受け、受話器を置いた。

その内容をキタハラは何度も反復した。

スギヤマは確かに電話の向こうで「ミュージアムを作る」と明言した。

スギヤマは決して早口でも小さな声でもない、穏やかだが、語尾のはっきりした語り口である。

そのスギヤマになん度も聞き直してしまった。

えっ！スギヤマさん、もう一回言って！

ミュージアムをどうするって？

スギヤマは何度聞かれても同じ言葉を繰り返す。

「だから、キタハラくん、ミュージアムを作ってあげるよ」

受話器の向こうで、スギヤマが冗談を言っているとも思えない。

「キタハラくん、よく聞いて、ボクが、キタハラくんのテイントイを主人公にしたムービーを作るよ、いいだろ、日本の最高峰のアーティストを総動員して、作るムービーだよ」

キタハラも、さすがに小吉が言う構想を理解してきた。

キタハラももちろんスギヤマの活躍は知っている、と言うか、知っているどころではない。

テレビをつけるとスギヤマが演出をしたコマーシャルが頻繁に流れていたからだ。

今までの商品名だけを連呼するコマーシャルや、アイドルが登場するだけのコマーシャルとは全く別物の世界をスギヤマは世に送り出していたし、広告の世界では知らぬ者はいないという地位を確立していたからだ。

そのスギヤマさんがボクのおもちゃを使ったムービーを制作してくれると言っている。

「キタハラくん、コマーシャルなんて短い尺じゃないよ、見応えのあるムービーさ！

物語をボクが書いて、アーティストの力を結集させて作る大人の寓話だよ。

「大人の寓話……」

「そう、寓話さ、子供たちは……例えば……酒場に入ってはいけないじゃない」
子供の時間は終わり、って言ってさ、大人だけで夜中に酒を飲んだり、麻雀をしたりしてさ、子供たち、つまり自分は早く大人になってその仲間入りしたいと想像するんだよ。

キタハラは電話を持って、大きく頷いた。

「わかる、わかるよ！スギヤマさん」

「でもさ、大人になってその世界を覗くことができたり、参加するようになるとね、子供の頃に憧れた世界は実は色褪せているんだ。そこで初めて気づくんだ、本当は自分たちが子供の頃にいた世界が輝いていたことをね。だけど……逆戻りはできない。子供は大人にあこがれて、大きくなる」ってみんなよく言うけど、あれは嘘さ」

キタハラは受話器を落としそうになる

嘘……思わずスギヤマの嘘をリフレインした

そうだよ、嘘っていう言い方が少し、どぎついなら“まやかし”とでも言うかな

一緒か、スギヤマは電話の向こうで笑った。

大人になった後も、子供の頃に見た情景や感動を忘れずにいた人だけが、本当の意味で大人に感動をあたえられる人になる。

キタハラくんみたいにね。

人は大人になると感動を忘れていく生き物さ、ボくらクリエイターはそれを知っているから技法として擬似感動体験を映像で表現して、商品を買わせる。

しかし本物の感動を与えることはできない。

あくまでもテクニックで感動を演出して、流行の楽曲に乗せてブラウン管の向こうにいる消費者に届けているだけさ。

だけど、キタハラくんのおもちゃは違う。

何を間違ったか、本来消費されてスクラップになるはずだったテイントイが奇跡的にキタハラくんの元へ集まってしまった。

偶然だと思うかい？

キタハラはなんて答えていいかわからない。

これは偶然なんかじゃない、必然という表現でもない、あえていうならこれこそが子供の頃に憧れた世界を色褪^{いろあせ}せることなく持ち続けた人だけが得ることのできる奇跡さ。

奇跡……

キタハラはスギヤマの言葉を何度も咀嚼^{そしゃく}する

奇跡……

奇跡……

奇跡……キセキ

どう？

キタハラくん、ボクが奇跡のミュージアムを作ってあげるよ

キタハラはスギヤマへの「お願いします」という返事をする前に通話が切れたことを気付かず、兄から「おい照久、電話終わっているんじゃないか？」という声で我に返った。

受話器からは“ツーツー”という信号音だけが聞こえていて、受話器を本体に戻した。

まだ全てが飲み込めた状況ではなかったが、それでもスギヤマさんがおもちゃのムービーを作ってくれ、そのタイトルが「おもちゃの博物館」で、そのムービーをボクにミュージアムとしてプレゼントしてくれることは理解できた。

ここが店じゃなかったら、大声をあげて、両手を天に向かってつき上げていただろう。

やった！ついにボクのミュージアムができるぞ！！

スギヤマから連絡を受けてしばらくするとキタハラ周辺の周辺が俄かに慌ただしくなった。

スギヤマの電話から3日後、アポを入れてきたのは若い映像ディレクターだった。

スポーツ店の営業時間が終わり、表看板の電灯を落とすと彼は現れた。

初めまして……イザワユタカと言います。

いかにもクリエイティブを仕事にしているようなラフな格好をしているが、決してラフ過ぎず、適度な清潔さを印象として与えている。

スギヤマが起用した笑顔に印象が残るまだ若い映像作家だった。

スギヤマから連絡を受け、小吉がキャスティングしたアーティストに対し、イザワが連絡を入れているということだった。

実は私もおもちゃが大好きで、特に手塚治虫さんの鉄腕アトムを集めています。

どこかで見た面影だなとキタハラは記憶を辿るとイザワが一冊の雑誌をショルダーバックから取り出した。

その雑誌にはキタハラも登場していたので、アトムコレクターとしてイザワが登場していたのを覚えていたのだ

初対面のぎこちなさがその雑誌で消えた。

イザワさん、覚えているよ、あのアトムのパedalカーはいいね。ボクは持っていないな。

キタハラはイザワがコレクションしていたパedalカーを話題にした。

私も同じ誌面にキタハラさんが出ていて、その同じ雑誌でボクのコレクションを紹介してもらい、すごく光栄でした。

コレクターとして名前が知れるようになると、このように初対面でもコレクター同士すぐに打ち解けることができるようになったことがキタハラには何より嬉しい。

しばらく、コレクション談義で盛り上がった後、イザワは「ところで」と本題を切り出した。

それから約2時間、時間が経つのも忘れ、キタハラはイザワの話を夢中になって聞いた。

誰が演出し、誰が撮影して、音楽は誰で、キタハラにとって未知の世界がそこで語られていた。

もちろん、ディレクターは杉山小吉である。

撮影は大西公平

音楽は上野耕路

スギヤマがキャスティングした名前を言うだけでイザワは高揚^{こうよう}している。

その高揚からもこの撮影のためにスギヤマが集めたスタッフの凄さが伝わってきた。

「そして」とイザワは最後に撮影する場所について話し始めた。

「実はまだ撮影場所だけは決定していないんです。」

キタハラもリピートする「決定していない」

「はい、白金にある朝香宮家を予定しています」

「予定？」

「スギヤマさんがどうしてもここを使いたいとリクエストしているのですが、まだ許可が下りていません。現在、製作会社のピラミッドを通じて、政治的なチカラを使えるところから打診している最中です」

朝香宮家？

キタハラはどこかで聞いたに名称に記憶を辿る。

イザワは言葉を続けた。

「実は現在、東京都が東京都庭園美術館として開園を目指しているタイミングなため、こちら側としてはいいタイミングでもあるのですが、その反面、開園する前に場所を使用させるのは無理だと言った反対勢力もいて、まだまとまらない状況です。」

「あの目黒にある朝香宮家ですか？」

キタハラが想像する施設とイザワが言う東京都が東京都庭園美術館になる朝香宮が所有していた建物はどうやら同じ建物のようなのだ。

「はい！あの朝香宮家の建物です」

イザワは自慢げに胸を張った。

あんな場所で撮影するのか？キタハラは^{あぜん}咄然とした。

朝香宮殿下は^{くにのみやか}久邇宮家第8王子、妃殿下は明治天皇第8皇女として生を受けている。その殿下と妃殿下の住まいとして朝香宮邸は昭和8年（1933年）に建てられた。

朝香宮鳩彦王が住んだ屋敷はその後、本人と共に奇異な運命をたどることになる。戦後、GHQの指令により皇籍離脱した朝香宮鳩彦王は屋敷も1974年からプリンスホテルの本社として使用された後、元の主人が出ると亡くなるのを待つように1981年に東京都に売却された。

場所は決まらないまでもその他の事案は大方決定しているようだった。

最終的には場所が決定し次第になりますが、ゴールデンウィークあたりをスケジュールしています。

「これから、脚本を作成することになると思いますので、そのたたき台が出来たらもう一度伺います」

そう言ってイザワは夜の京橋に消えていった。

名前は聞いていたけど、そんな場所で撮影ができるんだ。

スゴイな

確か、皇族の住まいだった館（やかた）を都が公共資源として受け取り、公開しているような説明だったと何かで読んだことがある。

撮影場所が決定し、いてもたってもいられなくなり、キタハラは店が休みの日曜日、骨董市の帰り道にその門をくぐった。

華族の住居だったその洋館はアールデコ洋式美で設計されていた。

建設は昭和初期とある。当時のフランスはアールデコの全盛期で、その美しさに魅せられた親王夫妻が設計を依頼されたと館内の説明には書かれている。

こんな場所でおもちゃミュージアムが実施に開館できたら、すごいだろうな、あまりの規模その美しさに圧倒され、キタハラはシャンデリアが下がる精華な部屋で一人天井を見上げた。

すごい！

ボクが生まれた 1947 年には、当時の吉田茂外相もここを公邸として使っていたんだ。

キタハラは吉田茂の息遣いを探した。

キタハラは自分のおもちゃがここに運び込まれ、撮影されることを想像して胸が熱くなった。

1982 年までは国賓の迎賓館として使われていたので、こうして今自分が建物の中に入っていることも、ある意味、奇跡みたいなものだ。

それにしても一般公開して、すぐにここを借りれるなんて、制作会社の政治力をキタハラは改めて思い知るようになった。

数日後、先日のディレクターから場所が正式に借りれたと連絡が入り、それと一緒に具体的な撮影のスケジュールが届けられた。

スケジュールを見て、まず驚いたのがその日程の凄まじいほどのタイトさだった。

洋館を借りれる日は予算とも兼ね合わせて 1 日間に限られ、その一泊二日のような強行日程全ての撮影を行うことが明記されていた。

キタハラは出演させるおもちゃの選定に取り掛かる。

なるべく多くのおもちゃを出演させてあげたい。気持ちはその 1 点に尽きる。

限られた時間とカット割りの中での戦いになりそうな感じだ。

撮影の日が近づいてきて、キタハラはまだ一週間以上もあるというのに用意されたシナリオに合わせて、出演させるおもちゃの選定を始めた。

京橋で仕事が終わると地下の倉庫に直行して、まずは SF のおもちゃの棚の前に座った。

家族ともう一つヤノを救ったのは、音楽の力だ。

自身の病名が判明し、絶望の淵から救いを求めたのが音楽だった。

音楽を聴いている時だけが地獄の日々を忘れることができた。

仕事の関係を含めた中で集めたレコードや CD をヤノはからだの自由が利くうちに全てをデータ化することを思い立った。

レコードをターンテーブルに置いたり、CD をデッキにセットすることは大きな負担がかかることは容易に想像できた。

自分のからだの自由が効くうちにヤノは全ての音源のデータ化を始めた。

ジャケットから LP や CD ディスクを取り出し、それを MD メディアに読み込んでいく作業に没頭した。

その傍らで二人の娘が作業を終えた LP や CD ディスクを元のジャケットに戻していく。

膨大な作業の途中、ヤノの手が止まった。

そのアルバムジャケットには真紅を基調としたデザインが施されていて、「E」の文字が切り抜かれていてアルバムタイトルのロゴになっている。

ヤノはこのアルバムは封を切っていなかった。



なぜ封を切らないままここにあるかヤノは思いたそうとしたが、記憶はそのアルバムを手にした時間を曖昧にしている。

ヤノは ALS が進行し、痺れ^{しびれ}始め出していた手でアルバムを手にした。

ビニールがどうしてもうまく外せずにイラッとしそうになった時、ヤノの後ろでジャケットを片付けていた娘がヤノに手を差し伸べた。

やらせて、お父さん、パパ！

エランは笑って、ヤノからそのアルバムを受け取り、丁寧に保護ビニールを外した。

これが、パパが矢沢永吉さんのアルバムを 2 作目の作品ね。

エリトと一緒に聞いていい？とヤノに尋ねた。

レコードや CD を聴いている時だけが、迫り来病気の終着点、つまり体の自由が全て奪われるという悪夢を少しだけ、忘れさせてくれるような気がしている。

もちろん、気のせいだ。

つかの間の気休めに過ぎないとわかっているけど、ヤノは音楽の持つ、力に縋^{すがり}りたいと思っていた。

二人の娘も同じ気持ちだったのだろう。

できるだけヤノとの時間を一緒に過ごすそうと、最近ではどこにも出かけず、ヤノの周りにまわりつくようにヤノの手伝いをしている。

「お前たち、他にすることあるだろう？」と口では言っているけど、娘と過ごす限りある時間はヤノの荒^{すさ}み^みがちな気持ちを穏やかにしてくれる。

ママの知らないラブレターとか出てこないかな？と娘はヤノから渡されるアルバムをせっせとデーター化する。

音楽が好きで、それを仕事にすることができた。

趣味で弾くギターは仲間内では「プロ並み」と言われ、満更^{まんざら}でもない。

しかし、そのギターとも、もうすぐお別れだ。

エランがアルバムの中から一枚の写真を見つけ、歓声をあげた。

ワアー、これパパ？

エッ、どれ、その声にエリトがすぐ反応する。

見せて、見せて！

ヤノも気になり、いつの写真かと、古い一枚の写真のをぞき込む。

そこには二十^{はたち}歳の頃だろうか、若いヤノが友達と微笑^{ほほえみ}んでいた。

上京し、友達ができ、毎日、デザインの話や、女のこの話を夢中でしていた頃だ。

友達は何？確か、菊五郎？懐かしい、この写真もまた、ひたすら毎日を生きる自分がいた。

ワアー、パパ、若い！

でも 20 代にしては少し老けてない？

屈託なく笑う二人に娘。

「何言ってるんだ、どう見ても、美男子だろう？パパ結構もてたからな」

そう言ってヤノも笑う。

「ママにも見せなくちゃ」

そう言うと、エランとエリトはヤノの写真を大切そうに机の上の写真立ての横に飾った。



そして再び、レコード整理の作業に戻る。

エランはジャケットからレコード盤を取り出すと、その盤に鼻を近づける

「新品の匂いがする」

そう言ってターンテーブルにレコード盤をセットし、いつもヤノがするようにクリーナーで盤も一周円を描くように拭く。

「覚えちゃった。いつも、パパこうしてレコードをセットしていたから」

ヤノはエリトがオーディオにセットする様子をただ、眺めている。

「パパよく言ってたね、矢沢さんは音楽的にすごくクリエイティブであんなに綺麗なメロディを作っているのに、生き様ばかり取り沙汰されて、正當に評価されていないことに俺は怒っているって」

レコード盤に針を下ろすと独特のノイズが聞こえてきた。

娘と一緒に矢沢永吉さんの音楽を聴いている。

「私、この“逃亡者”って大好きなんだ」

「いい曲だな、パパも好きだ」

ヤノと二人の娘は時にハモリ、また時にはソロで歌う。

Runaway 南へ向かえば今

答などないと気付いた

Dead Town おまえの瞳の奥

つらい明日が ひそんでいたから

噂の街角 Run Away Free

誰も明日を Nobody Knows

Moonlight かわいた砂の上に

立ちつくすは ふたつの影よ

Highway おまえのくちびるから

にがい吐息が こぼれ落ちてく

噂の街角 Run Away Free

誰も明日を Nobody Knows

Flash Back ふたりはあの街には

足跡さえも 残せはしない

Border Line 越えたらそこから先

ふたりをさえぎる 昨日はないから

噂の街角 Run Away Free

誰も明日を Nobody Knows

噂の街角 Run Away Free

誰も明日を Nobody Knows

噂の街角 Run Away Free

誰も明日を Nobody Knows

“誰も明日を知らない”か？

そう、誰も明日を知らない、だからこそ、その一瞬一瞬を精一杯生きるんだ。

えっ、何て言ったの？パパ

いや、独り言、

「やめてよ、3人しかしないのに独り言なんて」エリトはそう言って笑う。

「わかるなー！

この“誰も明日を Nobody Knows”」

今度はエランが逃亡者を絶賛する。

それにしてもお前たち、よく歌えるな？

だって、パパこの曲、毎日聴いてたよ……

そう言ってエランは笑った。

そうだよ、エリトも同調する。

「毎日だもんね」

おい、ギター取ってくれないか？

二人の娘は少し戸惑っている、進行する ALS で、ギターはもうしばらく触っていないはずだ。

パパ……

大丈夫だから、早く、そこにあるだろ、パパのギターだよ……

エランはヤノの言う通り、ギターをヤノの元に運び、抱かせるようにギターを渡した。

久しぶりだな……この感覚……、

確か……人前で弾いたのはキタハラさんと一緒に横浜のホールだったな……人形の家かな。

少しずつ、体が不自由になり、車椅子に座っての、プレイだった、今でもよく覚えている。

電源を入れないでヤノはコード進行だけで「逃亡者」を弾いた。

♪Runaway 南へ向かえば♪ 答などないと気付いた……

やはり指先に感覚が上手く伝わらないのだろう、正確なコード進行をすることができない。

それでも、ヤノは止めようとしない、

エリト、歌ってくれ、

そう言われ、エリトもギターの進行に合わせて歌う。

噂の街角 Run Away Free

誰も明日を Nobody Knows

エランの声はいつしか涙声になっている、それでも歌うことを止めない。

噂の街角 Run Away Free

誰も明日を Nobody Knows

ヤノはコード進行がままならなくとも、サビの部分をもう一度リピートして、

拍手！そう言ってヤノはギターをシャフトして演奏を終えた。

パパ！パパ！……

エランとエリトは同時にヤノの胸に顔を埋めて泣いた。

なんだよ、どうしたんだよ……そう言うヤノの目にも涙がうっすらと光る。

ヤノは思い出していた。

1983 年のあの頃を……

ヤノはこのアルバム E'(イーダッシュ)とその前作、「I'm a model」のデザイン制作の全権を矢沢永吉から受けていた。

あの日から、

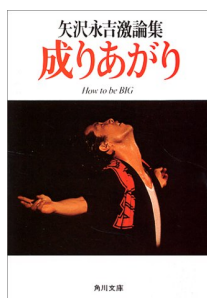
このアルバムから全ては始まったんだ。

ヤノは六本木駅の改札を約束の 19 時の 1 時間前に降りていた。

初めて行く場所ということもあり、早めに駅まで行こうと思ったが、さすがに早過ぎた。

ヤノは地上まで階段を上がり、駅ビルに入っているブックセンターへ向かった。

そして、ベストセラーが並ぶコーナーへ行き、迷わず「成り上がり」を手にした。



発行以来、何版も刷りを重ねたおかげで発売以来かなりの時間が経っていてもその本は売り場のメインに平積みになっていた。

若者が一人その本を手に入れている。

ヤノはその若者に声をかけた。

迷っているのかい？

若者は声をかけられたのが自分と気づきながらも、変なオヤジに突然声をかけられ、どう対処していいかに困っている。

ヤノはもう一度、言葉を発した。

「もし、その本を買うかどうか、迷っているのなら、絶対に買ったほうがいい」

質問の意味がはっきりして若者は切り返した。

「おう！買うよ、おっさんに言われなくても、買うに決まってるよ……」

「おっさん……言うな！まだ 34 歳だ」

若者は壇を切ったようにヤノに話し始めた。

「何のために、オレは東京にいるんだ。って考えたんです。

皿洗いをしに来たのか。そうじゃない、デザイナーになるために北海道から来たんだ」

ヤノはデザイナーという言葉に響いた。

「君はデザイナー志望なのかい？」

「ボクも、実はデザインの仕事がやりたくて香川から東京に来たんだ。

デザインの仕事がやりたいなら、どんな形にせよ、やるべきだと思うな」

ヤノは率直に気持ちを伝えた。

若者の言葉から戦闘的な言い回しが消えた。

「……言ったんです。今月でバイトを辞めますって、社長も、ある程度、オレの仕事ぶり知ってるから認めるしかなかったようでした。

だけど、正直、不安だったので、この本に背中押してもらおうって、だから決して本を買うのを迷っていたのではなく、本を手にしたら感動して動けなくなってしまったんです」

そう言って彼は笑った。

ヤノは「ボクにその本プレゼントさせてくれないか？」そう言って彼が持つ、本を渡すように手を差し伸べた。

そんな、他人だよ、彼は戸惑い、ヤノを改めて見る。

「おっさんだって、そんなサクセスしているようには見えない」

そう言って彼は笑った。

そうだ、ボクも今日からサクセスのスタートを切る。

「だからそのよく言うじゃない、慈善を施すって……」

「なんだ、ずいぶん自分勝手な慈善だ、すっかり打ち解けた若者は観念したように、その慈善もらうよ……そのかわり、俺がサクセスしたら、おっさん、いや、先輩のオフィスに一度行かせてくれ、名刺くれないか？

ヤノは「もちろん」と名刺を渡し、「成り上がり」をレジに持って行き、会計を済まして、買った本を彼に渡した。

「頑張れよ、いや……違うな、一緒にサクセスしよう」そう言って握手を交わし別れた。

若者はサクセスを求めた。

男は成り上がりを読んでいても、読んでいなくても、矢沢永吉を知っていても、いなくても、サクセスは……金持ちになること……男ならカッコいい外車を買うこと、そんな分かりやすいターゲットがあった時代だった。

まだ、IT バブルもない時代、金を得る手段は単純だった。

矢沢永吉のように音楽で一発当たれば、スターダムという階段を一気に駆け登ることができる。

土地はそこに住んだりた耕す場所から、所有するだけで金を生み出す黄金色をした魔法の絨毯じゅうたんのような投機の対象になり、一所懸命というその土地を「命をかけて守った」意味は、別な意味で金のために血を血で争う戦国時代のような対象になり、不動産というよくわからない言葉に皆、狂乱した。

そして 19 世紀にチューリップが期限とされた株取引は知識がなくても近所のタバコ屋で買うように誰もがただの印刷された紙切れを買い求め、その証券はまさにゴールドラッシュを目指す人々のように黄金のシャベルでサクセスを掘り起こそうとした。過去の革命は農耕器具や蒸気機関車の発明だった。このバブルな時代も去ってしまえば、負の遺産のようなものだったという歴史家もいるが、そんなことはない。若者は皆、サクセスという欲望に最も直結する魂を燃やしたのだった。

海の向こうでも芸術が一部の特権階級のものから、路上のポップアーテストが落書きをしてロック歌手と肩を並べる存在になり、従来のアートのシーンは全く別のマーケットを生み出していく。

この時代はサクセスとバブルと同義語だった。

一気にスターダムを駆け上がり、^{スター}星を掴んだとしてもそれは^{まぼろし}幻だ。

スターダムに上り詰めた後は弾けるだけ、
歌で一発当てたいと夢みる少年少女を大人が作ったシステムでうまくスターに仕上げていく
1 億円かけて 3 億売り上げて 2 億の利益を上げていく。
夢が全くない世界だからこそ夢の物語をうまくでっち上げて虚構の世界で金を生み出すのだ。
山崎は 280 万の資本金をわずか数年で 200 億にして、自宅の屋上に入ることもないプールを作っていた。
矢沢永吉はこの本を 28 の時に長者番付に乗り、キャデラックに乗りタバコを買いに行くことを宣言した。
矢沢や山崎のサクセスには既得権益がない若者が自分の力だけでサクセスをつかんだことが素晴らしかった。
つまりサクセスの正体こそがバブルだったのだ。
弾けるように仕組まれた時代だっただけの話だ。
しかしバブルが弾けた後にこそ、人生の戦いが待っていた。
バブルだということを体験して、散々な目にあった人だけが次のリアルな戦いに進めたのだ。
どんなゲームでも勝ち続けるゲームはない。
100 戦して 49 勝してあと一つ勝てるかどうかで勝者と敗者の分かれ道になる。
実際、山崎はいくつもの店を潰し、その後、矢沢永吉は 35 億の負債を裏切りによって抱えている。

ヤノは定刻に事務所に着き、ドアを開けると中から「すぐに出かける！」と言われ、扉から部屋に入ることなく、下りのエレベーターに乗った。
1 階のボタンを押す相手に「どこに行くんです？」と聞くと
何！ボけてんだよ
ヤザワさんの事務所に決まっているじゃない

彼はせわしく、バックの中を探し、財布を取り出した。

えー！

ヤノはあまりに早い展開についていけない。

今日はこちらへの挨拶だけと思ってまして、

「そんな暇な人はこの業界にはいない！矢沢さんにアルバムを専門にデザインしているイキのいい奴がいるって言ったらすぐ会いたって」

今日はヤザワさん事務所にいるから行くんだよ！

ここからタクシーで10分ぐらいだ、

通りに出るとタクシーを捕まえ、住所を伝える。

あっという間に住宅街にある高級マンションの入り口にタクシーは止まった。

外観からはそこが音楽事務所になっている様子は全く伺えない。

樹齢100年を優に超えていそうな木々が鬱蒼^{うっそう}とモダンなマンションを囲み、塀の外からはそのエントランスぐらいしか見えない構造になっている。

タクシーに乗ってから、数分間、ヤノは呼吸を止めていたようにタクシーから降りると顔を上にして大きな深呼吸をする。

それでもあまり酸素は体に入ってこなかった。

マンションの入り口にロックがある建物はニューヨークでは普通だったが、日本では初めての体験だった。

インターフォン越しに到着を告げると無人の扉が開かれた。

エントランスからさらにもう一箇所のセキュリティを越して、ヤザワのオフィスという501号室のナンバリングされた部屋の前に二人は立った。

そこにも「ヤザワ」を表すようなワードは一切表記されていない。

最後のベルを押すとすぐに若いスタッフが重厚な扉を押し、二人を迎え入れた。

靴のままどうぞ、そう促され、二人は大きなガラスに面した部屋に案内された。

ソファに座り、男は窓の外の景色を見ているようだった。

「ボス！ご到着されました」

そのスタッフが“ボス”と呼びかけに男はソファをスクッと立った。

ヤノは

これが！

あの矢沢永吉か！

スーパースターが^{まばゆ}眩いばかりのオーラを^{まと}纏い、そこにいた。

あまりの衝撃に言葉を失っていると、スーパースターは

「はじめましてヤザワです、ヨロシク！」とヤノに手を差し伸べた。

ヤノは生まれて初めて聞いたロックが体を震えさせた時の感覚が蘇った。

矢沢永吉はロックシンガーではない、矢沢永吉、そのものがロックだということを理解した。

本当にヤザワさんは「ヨロシク」と言うんだ。

あまりの出来事に感激して、あの有名なフレーズを生で聴けたことでヤノは不思議と震えが止まり、「こちら、ヨロシク」と返せるわけもなく、

「こちらこそヨロシクお願いします」と生まれて初めて挨拶を覚えた子供のようにぎこちなく差し出されたヤザワの手を両手でがっしりと握り、返答した。

今から10年前に、リブ・ヤングでキャロルを見た時より数段貫禄が増していてビッグからグレートになった矢沢永吉がそこにいた。

その時の衝撃は今でも鮮明に覚えている。

もし、ボクが音楽プロデューサーだったら、直ぐにありとあらゆるテレビ局に電話して交渉するくらいキャロルはイカしていたからだ。

あなたがアルバムジャケットを専門にデザインしているや、えーと失礼、ヤザワは名前に詰まった。

「ヤノです！ヤノマサユキです。香川生まれです、香川の観音寺市という所ですが」と言った途端……

「おう！ヤノさん！香川、最高！GREAT！」とボクを正面からぎょろっとした目で
射抜くように凝視して、ヤザワは急に、日本で爆弾、落としたい所が2ヶ所あるんだ
よ」

と真顔になった。

両手を広げ、例の顔を少し斜めにして、口をとんがらせて

「爆弾よ！ドカーン！と一瞬で町は消滅、その町が今日ボクをここまで連れて
きてくれたセトさんの生まれ故郷、福岡県の炭鉱町とボクの漁師町の町だと言った。
ヤザワさんはその理由をなかなか語ろうとしない、
爆破したい町と聞けば理由を聞きたくなる。

勇気を絞ってヤノはヤザワさんに「どうして爆破したいのですか？」とその理由を聞
いた。

ヤザワさんは

「キャロルを解散してさ、すぐにビッグな箱を借りるわけもいかないからさ辛い旅を
続けていわけさ、地方に行って、数百とかの、小さいホールを借りてさ、客も入った
り、入らなかつたり……

そこまで言って詩を口ずさむ。

きつい旅だぜ、お前に分るかい

あのトラベリン・バスに揺られて暮らすのは

若いお前はロックン・ロールに憧れ

生まれた町を出ると言うけど

その日ぐらしがどんなものなのか……

きょうぞう
恭 蔵の世界まんまよ……

ヤザワさんは自分のここまでの道のりを名曲「トラベリングバス」に例えた。

ソロになってから全国を回っている時に、客が暴れて演奏を中断した会場が偶然にも
セトさんとボクの町だとヤザワさんは笑った。

観客、みんな暴走族よ、特攻服着てさ……舞台の袖から見てたら、開演前からガン飛ばしたとか騒いでるし、ライブ始まったら始まったで、今度は客席見たら、喧嘩してんだもん……全く。たまんないよ、こちとら、それで翌年から出入り禁止、出禁よ……

怒っているようでもあり、過去を少し懐かしんでいるようにも見え、ヤザワさんは上機嫌だった。

ヤザワさんはあらかじめ、ボクのこれまでの作品も見ていてくれたようで、次のアルバムのコンセプトを語り始めた。

次のアルバムもセルフプロデュース、

録音は全て海外、ロス、

作詞は全てちあき。

彼に全てアルバムを任せる……

PV も作る、

リリースは夏、

次々と矢沢は自分のプランを話していく。

その言葉には「できたら……」とか、「もし……」といった曖昧な形容詞が一切入っていない。

PV は見た人の^{どぎも}度肝を抜くような大掛かりな仕掛けをしてね、ハリウッドも真っ青なやつに仕上げる。

そう言って矢沢は少し茶目っ気のある笑顔をヤノに送った。

「ヤノさん、一つ質問があるんだけど、いいかな？」

ヤノは矢沢本人から質問と聞いて、血液が心臓から排出される量が一気に増えた。

ヤノは身構えつつもが、「はい」と返事を返した。

「アルバムのサイズは 300x300mm でしょ」矢沢はいきなり数字を出してきた。

300x300、そうこれはヤノが世界に勝負する上で大切な数字だ。

「はい、僕はこの 300x300 に命を賭けてます」ヤノは答える。

「GREAT！」

矢沢が嬉しそうに反応した。

その反応を見た瞬間、ヤノは矢沢が何を思って、この数字をヤノに伝えたが理解した。

ヤノを矢沢に紹介するために連れてきたセトはよくわからないと言った表情で二人のやり取りを、ただ息を潜めて眺めている。

「わかりました」

矢野は何も説明せずにこうこう答えた。

その一言で今度は矢沢が理解した。

「OK！話は終わりだ、ヤノさん、君にこのアルバムデザインを全て頼むとする、あとはうちのスタッフと話を詰めてくれ、じゃあ、“ヨロシク”と握手を再び求める。

ヤノはその手を握りしめながら、「一つ私も質問してもいいですか？」と伝えた。

矢沢は「もちろん」と答え、ヤノの質問を待つ、その間もヤノは矢沢の手を離さない

「矢沢さんにとって、ロックン・ロールとは何ですか？」

「最高！セトちゃん、いい奴紹介してくれたね、いい質問だよ、

ヤザワにとって、ロックとは、

それはね、若い ^{スピリット}魂 だけがなしえる **エネルギーのアートよ！**」

「それじゃ！ヨロシク！」というともう一度ヤノの手をグッと強く握り、ヤザワは部屋を出て行った。

夢の時間とはこのようなことを指すのだろう。

セトと別れ際に、さっきのサイズで何がわかったんだよ？とヤノに尋ねた。

紹介者のセトさんにはちゃんと説明しなくてはとヤノはヤザワさんが示した数字はアルバムジャケットのサイズです。

それが 300x300 です。

ヤザワさんはいずれ CD をリリースすることを視野に入れてます。

セトは「CD？」と返す。

あの小さな銀色の板みたいな奴かい……

はい、CD です、compact disc の CD……

まだ一般的ではなく、シェアありません。しかしいち早く矢沢さんは自身の作品を CD で発売しようとしていて、そのサイズの確認のために[300x300]という数字を出してきました。当然、コンパクトディスクですから今のアルバムのサイズではなく、もっと小さなジャケットになるでしょう、そうなった時、300x300 ではなく、200x200 か、数字は定かじゃないですけど、その小さなサイズでも、大丈夫だろうな？とヤザワさんはボクに問いかけをしたのだと思います。

ボクも確信はなかったけど「大丈夫」と答え、それでヤザワさんは満足だったから、多分、ヤザワさんからの質問への答えは合っていたのでしょう……」

「そうか、ヤノくんは自らの手でチャンスを掴んだんだ……」

「いやいやこれからです。ボクのデザインでヤザワさんを納得させなくちゃならないですから！」

ヤノは自分を矢沢永吉に繋いでくれたセトさんに腰を深く折り曲げ、感謝を伝え、事務所までの帰り道を急ぐ、しかし、どうやってヤザワさんの事務所を出て、地下鉄に乗って事務所まで戻ったか、全く記憶がなかった。

何度も漫画のように頬をつねったり、時計を見たりして、現実を受け入れようとしたが、現実感が全くなかった。

しかし、ボクはついにヤザワさんの仕事をする事になったんだ。これだけは間違いない事実だった。

まずはキタハラさんに電話だ、公衆電話に駆け込んで、

「ヤザワさんのアルバム！デザインすることになったよ！ありがとう！」

ヤノは電話口で男泣きに泣いた。

キタハラも電話口でもらい泣きをする。

「よかった！ヤノさん！サクセスだよ、サクセス！」

ヤノは事務所に戻ると一人、数ある矢沢永吉のアルバムから「GOLD RUSH」をレコードラックから取り出し、仕事机の上に立てかけた。

「GOLD RUSH」



発売は 1978 年、最高峰のスタジオミュージシャンを終結させ、制作した日本ロックの金字塔だ。

ギターは相沢行夫と木原敏雄のコンビネーション、ベースに後藤次利。

坂本龍一をキーボードに招聘、ドラムは村上秀一とつのだひろのツイン。さらに

「時間よ止まれ」のパートには高橋幸宏を起用、パーカッション斎藤ノブ、スティール・ギター駒沢裕城。

矢沢永吉の口から^{ゴールド}金を吐き出しているジャケットはあまりにも有名。

このアルバムを冠にした後樂園球場ライブでさらにヤザワ伝説は頂点に達した。

正式ライブ名は「矢沢永吉 後樂園スーパーバイオレンス・ライブ GOLD RUSH'78」

「成り上がり」という衝撃的な本を出して一世風靡し、'78 年 6 月発売のアルバム

「ゴールドラッシュ」は、3 月発売で資生堂の CM に使われたシングルカット「時間

よ止まれ」が100万枚セールスも後押しし、そのヒットに引っ張られ、日本中をヤザワ旋風が吹き荒れる。正にジャパニーズドリームの体現者になったのが1978年だった。

ヤノは一人そのライブ会場に足を運んだ。球場周辺を機動隊が取り囲む厳戒態勢の

下、ライブを決行、とにかく覚えていたのは中央に設置されたでっかい★のネオン管だった。

矢沢永吉が「ビッグ・スター」ということが広く認知された分岐点のようなライブだった。

ヤノの記憶は今でも鮮烈にまぶたに残っている「トラベリン・バス」から始まったライブは、香川という田舎に住んでいるヤノには考えられないような体験だった。観客の「永ちゃん!!」の太い声はコンサート中にずっと鳴り止まず、アンコールまで一気にボルテージを上げていく、その時のアンコールが「鎖を引きちぎれ」だった。

モンスターバンドキャロルの亡霊を捨て去るように単身アメリカに渡り、そこで矢沢永吉は本当のサクセスを掴む。

他のメンバーが解散の残滓に酔いしれている中、キャロル解散から20日後にアメリカに渡っていたのは有名な逸話だ。

そしてソロアルバム「I LOVE YOU OK」を引っさげてのソロツアー。

矢沢永吉はここでもキャロルを完全に否定するような曲構成を敢行、その結果ファーストツアーでの評判は散々で、"キャロルの矢沢"を期待するファンが一気に離れたが矢沢永吉は「元キャロルの矢沢永吉」でなく「一人のロックンローラー矢沢永吉」にこだわり抜く。

矢沢は後ろを振り返らない。

1980年代に入ると第一次とも言える黄金期を迎え、売り上げ・動員数、共にロックスターとしての地位を磐石にする。海外市場に活路を求め、アメリカ西海岸に活動の

拠点を移し、現地のプロデューサーやドゥービー・ブラザーズなどのミュージシャン
を起用したアルバムを世界・全米で発売した。

アルバム「ゴールドラッシュ」からレコード盤を取り出し、ターンテーブルに乗せ
る。

鎖につながれて
お前は生きるのかい
夢が やせちまうぜ
あきらめた顔のまま
老いぼれてしまうのかい
汗も 流さないで

Gold Rush! 馬車を出せ
Gold Rush! 時代の荒野へ
Gold Rush! 魂の シャベルで
金を掘り起こせ

ひと山当てたら お前もスーパー・スター
そうさ 今は Gold Rush !

ヤノはこの歌を聴いて、自分のゴールドラッシュを目指した。
さあ、本物のゴールドラッシュに手をかけるところまで来た。
全身全霊を込めて、ボクは矢沢永吉のアルバムをデザインする。
ヤノは真っ白のケント紙に対峙し、線を引いた。

ビデオの制作当日、集合時間の午前5時に白金に到着すると撮影クルーがすでにスタンバイし、北原の到着を待っていた。
早朝の迎賓館は朝日に眩いばかりに輝いていた。



館内には^{おびただし}夥しい撮影機材が運び込まれている。スギヤマと並んでプロデュースの全権を持っている制作会社のプロデューサーがキタハラを見つけ、近寄ってきた。

「おはようございます。キタハラさん、本日はよろしくお願いします」

そして先日、京橋に打ち合わせに来たイザワが「北原さん、到着されました」

そう大声で伝えると、周囲から「おはようございます」の声が響いた。

キタハラは改めて、このプロジェクトの規模の大きさを知る。

決して狭くない迎賓館が制作スタッフで埋め尽くされていると言っても過言じゃない、そして、多勢いるスタッフは、誰一人として無駄な動きをしている者はいなかった。

その様子は^{とうそつ}統率の取れた軍隊を想像させた。

キタハラと同行したアルバイトが持参したおもちゃを用意された大きなテーブルに一つづ並べていく。

イザワがすかさず「おもちゃが並びます、このパーテーションから向こうは立ち入り禁止です」とアナウンスする。

イザワのアナウンスがなくても、キタハラのおもちゃの価値は周知されており、誰一人として、おもちゃに触れようという者はいない。みんな遠巻きに陳列していくおもちゃを見ている。

唯一、スギヤマがパーティーションの内側に入ってきて、「これですね」とスタートを飾るダンシングカップルを指差した。

キタハラも「はい、これです」と答える。

どうぞ、触ってみてください。

スギヤマは丁寧にキタハラからおもちゃをそっと両手で包むように受け取る。

「見てください。このおもちゃ、なんか、おもちゃが喜んでいるみたいでしょ」

キタハラが本日の主役であるおもちゃの一つ" DANCING COUPLE"を見せる。

そして「これは戦前の日本製のセルロイド製で、ゼンマイ仕掛けのおもちゃなんです」と説明した。

「いいなあ、実物は想像を超えているなあ」スギヤマは感心して、しばらく目を離そうとしない。キタハラはゼンマイを、巻いて、テーブルの上でスギヤマに動きを見せる。

すると、^{えんびふく}燕尾服と美しいドレス姿の男女が軽やかにステップを始めるようになめらかな横への移動、すかさずそしてターンしてまた移動。それはまるで舞踏会で踊る若いカップルの姿を彷彿とさせた。

「これだよ、まさに迎賓館に相応しいおもちゃだ！」

杉山は大喜びでキタハラに感動を伝える。

そして、いよいよ、スタッフ全員が定位置にスタンバイした。

台本の1カット目はこのダンシングカップルが周囲を養生の施されたダイニングルームをステージに見立て、自由に踊るシーンだ。

ダイニングルームには巨大なクレーンカメラが設置されている。

「クレーンを使ったハイアングルからのローアングルへのスムーズなティルト撮影が可能なのでおもちゃがある程度自由に動き回っても、このクレーンが追っていきます」

イザワがカットの説明をする。

照明に明かりが入る、いきなり部屋に朝日が差し込んだような光量に変わった。

イザワが「シーン１、カット１」と声を上げた。

スギヤマもディレクターチェアにつく、キタハラはカメラの構図に入らないように位置し、おもちゃのゼンマイを巻いて、カメラ監督からの「スタート」の掛け声を待つ。

キタハラはおもちゃに心の中で声をかけた。

「さあ、踊るんだ、自由に、みんなに二人の幸せそうな踊りを披露しよう」

監督が緊張を打ち破るように号令をかけた。

「スタート！」

ゼンマイが巻かれたダンシングカップルはキタハラの手を離れた。

カチ、カチ、カチ、

とゼンマイの音がしたと思ったら、おもちゃは動きを止めてしまった。

動かない、どうした、

キタハラは、「やり直します」という言葉を発しようと、おもちゃに手を伸ばそうとし、全員の視線がおもちゃに集中していた時、突然、ダンシングカップルは華麗なダンスを始めた。

踊った！

みんなの気持ちが伝わったかのだろう、ダンシングカップルは舞踊会のデビューを飾ったようなステップを切り出した。

その動きをクレーンカメラが床を這うように追っていく、スギヤマは目の前にあるモニターでその動きを追う。

「いいぞ！」思わずスギヤマが声を上げた。

その声にキタハラも心で叫ぶ、踊れ！いいぞ！

まばゆ
眩いばかりの舞踊会の幕が切って落とされた。

ダンシングカップルはゼンマイが巻き終わるまで、壁にもぶつかることなく、会場の中を踊り切った。

そして、まるでコンピューター制御されたようにキタハラがリリースした場所に戻り、カチ、カチと言って動きを止めた。

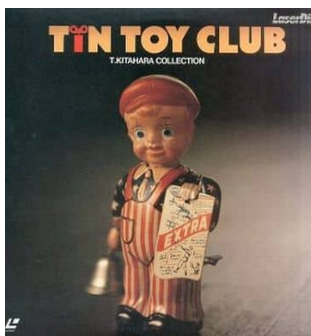
誰となく、拍手が起こった、スギヤマも満面の笑みを浮かべて、ファーストカットの出来栄えを褒め称えた。

「すごいね、キタハラ君のおもちゃはまるで生きているみたいだね」

撮影は1秒単位まで細かく刻み込まれていく、シーンが変わることはあっても、前もって準備されたシーンごとのセットがおもちゃたちを出迎え、撮影は進行していった。

バスルーム、キッチン、それぞれのセットがおもちゃの出番を待ち、そこにキタハラが魂を吹き込んでいく。それはまさにおもちゃに生命を与えていくように映った。

撮影開始から6時間が経過したところで最初のシーンの撮影が全て終了、イザワが「ランチタイム」を告げた。



全身全霊を込めたアルバム「I am a Model」のデザインがヤノの手を離れ、ヤザワオフィスに届けられた。

ヤノは自らヤザワオフィスまで持参し、受付に出たスタッフにデザインの最終形を手渡し、挨拶をして、青山から表参道までの帰り道を一人歩いた。

それにしても全てのスケールが大きくて、圧倒されっぱなしだった。

アルバムのジャケット撮影は、世田谷通り農大近くの109スタジオで行われた。

そのスタジオはまるで映画を撮影するような巨大なスタジオで、せいぜいジャケット撮影にここまで大きなスタジオをいらないと思っていた。

しかし、撮影が始まるとそれは危惧だということを知った。

なんとヤザワさんはフルセットの音響（PA）セットをスタジオに持ちこんでいたのである。

それは単なるジャケット撮影の域を超えている、そこがまるでライブ会場になるような状況を作り出していて、ヤザワさんが実際に歌っている所を撮影していくのだった。

当然、ライブのような自然な表情とポーズも決まる。

ヤノは撮影に臨みながら、その迫力をしっかりジャケットに落とし込まなくてはと覚悟を決めることができた。

デザインがある程度固まると同時進行でノベルティや販促のコンサート用販売パンフレット、チケット、ポスター、カレンダー、タオル等のグッズのデザインに突入していく。ヤザワさんのいるロス時間に合わせるため、夜中にデザインの決定稿が届くことも普通で、その日の朝がデッドライン、昼間は昼間で日本にいるオフィスのスタッフとの確認作業になるので、昼と夜は逆転でなく、境がなくなっていく、次第に時間さえも関係ないような日々が続いていた。

ヤノはヤザワさんのスピリットを形にすることのみに集中した。

そのスピリットとはヤザワさん本人がヤノの伝えた「エネルギーのアート」である。

「エネルギーのアート」という文脈^{コンテキスト}をヤノは何度も何度も、反復した。

以前、読んだインタビューでヤザワさんは「オレは生涯ロックし続けるんだ」という意味のことを繰り返し語っていた。

既にロック界の大物の存在であった矢沢永吉という存在、ヤノには世間が「大人の音楽」を求めたことに対してのアンチテーゼとしてこのアルバムがあるとコンセプト化してデザインの作業に取り掛かった。

1980年代、ロックは若者の特権であり、40代に成っても第一線で活躍するロックシンガーは見当たらなかった。

ヤノはアルバムの撮影で矢沢本人がギターを持つことにこだわったことにも注目した。

キャロル解散に際し、ヤザワさんが「ベースギター」を持たないことを宣言したことはヤノも知っていたし、事実、ベースギターを持つことをやめたことから誕生したと言ってもいいマイクパフォーマンスは今や、矢沢永吉の代名詞になっていた。

そのヤザワさんが、ギターを持つことは単なる原点回帰といったイメージを優先したのではなく、もっと新しい矢沢永吉に自分自身を^{ふか}孵化させるための儀式のように思えたからだ。

さらにキャロルで京浜工業地帯の労働者階級から醸し出したバンドのイメージは単に泥臭いロックンローラー的なイメージが強い矢沢永吉だったが、ベースをギターに持ち変えることで実に都会的で洗練された記号に巧みに変換させようとしている。

ベースじゃなく、ギター

不良な皮ジャンじゃなく、都会的なコート、

ミュージシャンは黙々といい音楽を作り奏でる。

リスナーは無心に肅々と音楽に耳を委ねる。それがミュージシャンとリスナーの最も健全で理想的な関係をヤザワさんは打ち破る、いや、いい意味でリスナーを裏切るところまで踏み込もうとしている。そんなエネルギーが矢沢永吉の全てから溢れている。

有り余るエネルギーがあって、初めて、アートと呼ばれる音楽に昇華する。
これがスーパースターなんだ。

ヤノはいい歌をただ歌っているだけのミュージシャンと自分の音楽をアートに変換できるアーティストの違いを矢沢永吉というフィルターを通す事で垣間見た気がした。

一言で言えば「ミュージックとアートの違い」だ。

いい歌は世の中にごまんとある。毎日、テレビやラジオから^{おびただし}夥しい数の音楽が流れている。

その耳当たりのいい音楽をメディアも「いい音楽」と持ち上げる。
持ち上げる理由はそれが「ビジネス」だからだ。

それを作曲するミュージシャンも、その自らが生み出した「音楽」をメディアに踊らされ、世に送り出す。

ただの音楽はそれで終わり。

しかし、一握りのアーティストと呼ばれる才能を有する者だけが「アート」と呼ばれる本物の楽曲を^{クリエイト}創造する。

アートは決して消費されない。もちろんビジネスであるので消費される側面は否定しない、しかし未来永劫、そのアートは歴史に刻まれていく。

ただのいい音楽と本物との差は、この「アート性」にある。

ヤザワさんの音楽はこのアートを追求し続けた結果、生み出されている。

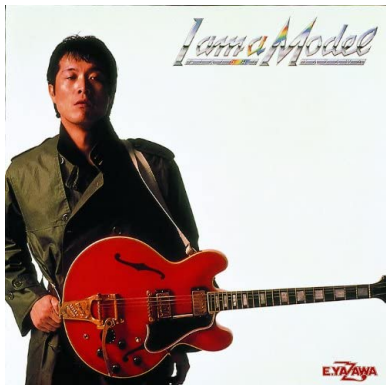
誰にも真似できない。

^{ゆい} ^{いつむに}
唯一無二……

^{ゆいがどくそん}
唯我独尊……

何より一旦矢沢永吉が歌いだすと、ヤノは生まれて初めてロックを聴いたときの感動が蘇^{よみがえ}り、カタルシスが頂点に上り詰めるができた。

そのカタルシスこそが、ヤノがアルバムジャケットの上で表現したい全てだった。



その映像は華々しく発表され、多くのメディアがその作品を知るようになった。

制作会社はキタハラに感謝の意味を込めたレセプションパーティを開催してくれた。

場所は東銀座にあるマガジンハウスのロビーが充てられた。

制作を指揮した杉山小吉のスピーチの後、キタハラにマイクが回ってきた。

スギヤマは「約束を果たせたね」と笑って、マイクをキタハラに手渡した。

キタハラは興奮しながらスピーチをした。そして最後に感謝を伝えると、大きな拍手と声援が起こった。

スピーチの後、来賓の挨拶が続いていたが、その様子をキタハラはどこか別な場所でその映像を見ているかのように眺めていた。キタハラの周りもすぐに人垣ができたが、そこで誰と挨拶を交わしたか、改めての取材の申し込みがあったことなど、後から手帳に走り書きしていたおかげでどうにか、相手に迷惑をかけないで済んだ。

その中で急に肩を叩かれ、夢の中にいるような気分から現実に戻された。

後ろを振り向くとそこにはヤノさんの顔が見えた。

「最高だね！キタハラさん、ついにミュージアムだ！」

「ヤノさん、ありがとう！なんか、こんな大勢の人が応援してくれて、感動して、こみ上げるものがあるね」

「ボクもグッときたよ」 そう言ったヤノの目は少し潤んでいた。

そうしているうちにもキタハラの周りには人垣が幾重^{いくえ}にもできている。

ヤノは「ほら、ボクなんかに構わないで、挨拶、挨拶、ビデオの宣伝しなくちゃ！」

そう言ってキタハラの背中を人垣の中に押し戻した。

そろそろ、レセプションも終わろうとした頃、スギヤマがもう一度キタハラの近くに寄ってきた。

「キタハラ君、そろそろ失礼するよ」

「スギヤマさん、なんてお礼を言ったらいいか？ボクのブリキのおもちゃ博物館を作っていただき……」

スギヤマは笑いつつも、「何言っているんだよ、これはただのビデオだよ、次は本物の、リアルなミュージアムを作らなくちゃ」と少し真顔になって言い放った。

本物……

リアルなミュージアム……

「そうだよ、キタハラ君にしかできない、誰もなしえない、まだ誰も作ったことのないミュージアムを作ってもらうためにボクはこのビデオを制作したんだ」

えッ！

スギヤマの意外な言葉に言葉を失っていると

「じゃあ、次はキタハラミュージアムのレセプションで会おう」

そう言ってスギヤマは会場を後にした。

ブリキの博物館じゃないキタハラミュージアム！

スギヤマさんは言った……キタハラミュージアム……

ボクの名前の入った博物館……

すっかり日の暮れた東銀座から、車を止めている実家の京橋まで歩く間、キタハラの頭の中は「キタハラミュージアム」で一杯だった。

「おい、スズキ、どうだ、なんか……ミュージアムできそうだな？」隣を歩く若者に声をかけた。

キタハラに話を振られたスズキは「できますよ、そうしたら俺、そこで働きます」と普通に返す。

「簡単だな……お前のその言い方は……」そう笑いながらも、キタハラの胸のうちに「もできそうだ」という気持ちが次第に大きく膨らんでいくのがわかった。

「やるか！スズキ！」

そう言うとスズキも「やりましょう。サクセスしましょう」と笑う。

やるか！キタハラミュージアム！

東銀座の街が未来を祝福しているように輝いている。

キタハラはこの景色は一生忘れないと思った。



あの東銀座の夜から一気に動きが加速することになる。

ミュージアムの場所探しが先ずスタートした。

青山、一番町、原宿、表参道、人気のある場所の不動産屋を日参する。

予算を伝えるとわずか 10 坪のペットショップ屋の出た後の物件を紹介された。

まだペットショップ特有に匂いが消えないでそのまま残っていた。

探し始めて、あっという間に都内、少なくとも 2 3 区内、人気スポットにはミュージアムを作るのに見合う場所はないことが理解できた。

東京を諦めたわけじゃなかったが、気晴らしに向かったヨコハマにキタハラのアナテナが反応した。

一斉に風靡したハマトラブームが去ったこともあり、ヨコハマは人気の観光地でなくなり、一地方お洒落な街に様変わりしていた。

いっその事、ヨコハマに来るか？

それでも元町通りにはお客はいたが、山手に上ると観光客が少しいるだけの静かな住宅の街になる。キタハラはその澄んだ空気が気に入った。

「ヨコハマゴールドラッシュか？」

山崎さんの「原宿ゴールドラッシュ」を見立てて、ゴールドラッシュと声に出すだけで単なる山手の丘も黄金が眠る丘に見えてくる気がした。

キタハラは東京での博物館オープンに見切りをつけ、新しいゴールドラッシュはこの街で起こそう、そんな風に想像すると気分はサクセスになる。

こうしてキタハラゴールドラッシュの場所は決まった。

その年の暮れ、1985 年も終わろうとしていた。

ミュージアムの開業まであと 4 か月。

時間はいくらあっても足りず、やることは次から次へと押し寄せてきた。

キタハラはヤノからロゴが出来たという連絡を受けて年の瀬の迫る日ヤノの事務所のある原宿に向かった。

ヤノはキタハラが到着するのを今か今かと待っていた。

昔、二人で旅をしていて待ち合わせの時間によく遅刻したことを思い出し、キタハラさんはいつもこうやってボクのことを待っていたんだと想像したら、今更だけど悪いことをしたと反省した。

ドアをノックする音が聞こえた。

ドアを開けると

ヤノさん！

キタハラさん！

と声が重なり合った。

開口一番「ロゴ、お待たせ！」とヤノはすぐにキタハラを部屋の中央の打ち合わせ用のテーブルに案内した。

真っ白なケント紙に「TOYS CLUB」とゴシック体のかっちりした文字が美しく並んでいた。

キタハラはそのロゴを体が固まったようにじっと見たまま何も言わず、立ちすくんでいた。

ヤノは言葉を発しないキタハラに不安を覚えたが、何となく声をかけづらい状況だったのでもう一つのデザインを見てもらおうと決める。

ヤノはこの最初に提出したロゴに決め打ちするか、最後まで迷い、念のため代替え案を用意していたのだ。

そちらも見てもらおうと固まるキタハラテーブルから離れ、自分の机の上にキープしていたもう1案のロゴデザインを手にした。

キタハラさん！背中越しに声をかける

「こっちも見て欲しい」と言いかけようとしたところで、キタハラは歓声をあげた。

すごい！すごいよ！

これが、ボクのミュージアムのロゴなんだね！

キタハラは満面の笑みを浮かべて、ヤノの両手を握った。

どうしたの？ヤノさん、浮かない顔してさ

このロゴ気に入ってくれたんだ？ヤノは少しトーンの落とした声でキタハラに問いかけた。

もちろんだよ！

当たり前じゃない、最高のロゴを作ってくれてありがとう！

ヤノはもう1案のロゴを自分のテーブルに押し戻し、キタハラの感謝に答える

そうでしょ、ボクもこれは最高なロゴだと自負しているんだ。

TOYS CLUB

キタハラのミュージアムが一つ完成に近づいた瞬間だった。

そうそう、キタハラさんにもう一つプレゼントがあるんだ。

ヤノは嬉しそうにキタハラに話しかける

もう一つ？いやいや、こんな素晴らしいロゴをさ、デザインしてもらって、さらにプレゼントなんてありえないよ

「でも何？プレゼントって」キタハラは悪びれずヤノに笑いながら言う。

「これこれ！」

ヤノはそう言って1冊の本をキタハラの前に掲げた。

その表紙には「原宿ゴールドラッシュ」と書かれていた。

原宿からひとつのサクセスストーリーが生まれた。

愛と友情とロックンロール・スピリットに満ちたその物語「原宿ゴールドラッシュ」は、街に生きる若者たちのバイブルとなって、ずっと読み継がれ、沢山の若者が夢を追う物語だった。

その本の中で主人公の山崎眞行はこう言っていた。

自分がサイコーだって思うことをやればいい。

キタハラは自分の脳天に何かが突き刺さった気がした。

山崎眞行のメッセージは天からの啓示に思えた。

キタハラはヤノから渡されたゴールドラッシュの1ページ目をめくった瞬間から興奮して眠れなくなった。

一睡もせずに読み終わると翌日、近所の八重洲ブックセンターに行き、すでに読んでいる「原宿ゴールドラッシュ」を注文した。



一週間ほど待たされて本を受け取りに行くと大量の本が段ボール二つ梱包でレジの横に置かれていた。

1冊だけ段ボールの外に出ていたのでそっとページをめくってみた。

本の奥付にはビニール袋に入った種がおまけについていた

その種を庭に植えて、自分の夢を叶えろとメッセージが添えられている。

夕張から新宿に流れ着いた若者は、金もなく、コネもなく、自分の夢の種を原宿に植えたのだ。それがあっという間に、ぐんぐん育ち、その育つ木は原宿で大木になる。彼が植えた種が育つと裏通りのような寂しい通りだった原宿は世界でも有数の刺激的な街になっていく。

サンフランシスコの金脈は外からやってきたわずかの移民によって偶然掘り起こされたが、炭鉱夫の息子は、ここ原宿で石炭の代わりに金を掘り当てたのだ。

ちっぽけな取るに足らないような夢や愛が、金鉱を掘り起こした。

やがて原宿でゴールドラッシュがはじまった。

本の主人公はまるで魔法のように、小さなアイデアが流行を生みだしていく。

この物語はあるひとりの男が、250 万円を 28 億円に化けさせたサクセスストーリーであり、そのサクセスをもたらした愛についての物語であり、原宿の変化を裏側からとらえた物語でもあった。

物語の中で、主人公が恋人とビデオ映画、「ライト・スタッフ」を観るシーンがある。

映画の中の言葉は、彼は時代がどうなろうと、自分の輝きだけは失うまいとしていた。彼の妻が、主人公がくじけそうになった時、こう励ました。

「力の限界に挑戦する男。私にはとっても魅力的よ。でも、昔話を生きがいにする男はガマンできない。過去にすがり、ひがみごとを言う男達…もしあなたがそうなったら、私は家を出て行くわ」

本を徹夜で読み、翌朝、近所の八重洲ブックセンターに向かい 100 冊の本を改めて注文したのだった。その本を受け取り、意気揚々と店に戻った。

兄のケイゾウは呆れて

「テルヒサ、おまえ自分の本ならわかるけど、なんで他人の本をそんなに買うんだ。」

バカか？と思わず口から出そうになった言葉をケイゾウは飲み込んだ。

上手く言えないけどボクの目指す世界はここにあるんだよ！ケイちゃん

「まあ、お前の価値観には文句を言っても始まらない。けどどうするんだ、その大量の本？」

段ボール2個分に50冊ずつ、本が入った箱をキタハラはカッターで開ける。

ケイゾウはもう一度、弟に尋ねる。

「その本をどうするんだ？」

「配るんだ！」

「配る？人が書いた本をか？」

ケイゾウはそれ以上何も言わず店の帳簿付けを始めた。

キタハラの中で意識が変わった。

それは「好きなことをして生きていきたい」という山崎眞行さんのメッセージをどうしたらそのように生きれるかという自分への問いかけだった。

怪人 20 面相

キングコング

シンガポールナイト

クリームソーダ

スーパーセックス、ロンドン

ガレッジパラダイス

ランデブー

ピンクドラゴン

新宿にあった「怪人 20 面相」には矢沢永吉が毎晩やってきては自分の夢を熱く語っていたと以前、山崎さんの本には書かれていた。

俺はビックになる！

必ずサクセスする！

1978 年位から原宿でも DC ブランドがでてくる。ジュン、ビギン、ニコルなど DC

ブランドが幅を効かせるがブームの後はほとんど倒産したか、事業を縮小させたりと、消滅していたが、山崎さんのピンクドラゴンは 1978 年頃からピークになり 1 日で 1 千万円と言う金字塔を作る渋谷の裏通りにはセイラーズが行列を作り、キタハラが通った青学の裏門の前にあったボートハウスには連日、ロゴの入ったスエットシャツを求め、3000 人の若者が日本中から若者がやってきて長い列を作っていた。

動機は単純だ！自分の作った服を加山雄三さんに着て欲しい。

若大将シリーズを映画で見て、そう思ったとインタビューで答えている。若大将はキタハラにとってもヒーローだった。

スポーツ店を兄と営み、加山さんが店に来てくれないかなアとどれだけ念じたかわからない。ボートハウスのオーナーだって確か同じ世代なはずだ。

山崎さんだって確か 2 つしか年齢は変わらない。

自分にもできるはず！

キタハラには根拠のない自信だけが溢れていた。

1986

あの東銀座でのレセプションからちょうど11か月後、1986年4月7日、横浜山手の丘にブリキのおもちゃ博物館トイズクラブがオープンした。
オープンした日はキタハラの間が大勢押し寄せ、お祝いの花束で狭いミュージアムショップは埋め尽くされた。

しかし、知り合いが一旦引くと山手には静かな日常が戻っていた。
近所のフェイリスの女学生が学校帰りに溜まり場になる程度、あとは一般のお客は数えるほどだった。

商品棚は知り合いが大量に買ってくれた後でスカスカの^{ありさま}有様、入場券を手渡すとスタッフのスズキも暇を持て余した。

キタハラはやることがないので広い庭に椅子を持ち出し、日光浴をしていた。
売り上げもあまりない、さらに暇を持て余している。しかし不思議と不安はなく、気持ちは穏やかだった。

ヤノは週末になると愛車で東京からやってきて、二人で庭のテーブルでコーヒーを飲んだ。

ヤノはあっという間にトップデザイナーの仲間入りをして、車好きの本領を発揮し、好みの車を手に入れ、成功を味わっているようにも見えた。

「北原さん、今、何を思っているか、当てようか？」

ヤノはさながらレーサーのような出で立ちでコーヒーを飲んでいる。

「何？ヤノさん、今、僕が何を思っているか？ヤノさんが当てるの？」

「そうだよ」ヤノは悪戯っ子のような表情を浮かべる。

「当ててよ」キタハラも笑いながら答える。

ヤノはカップに残ったコーヒーを飲み干して、こう話した。

「ボクたち、周りから見たら、サクセスしたように映るんだろうな、って……」

キタハラはまさに今、同じことをヤノに言おうとしていた。

「そうだよ、その通り！ボクも、ヤノさんにそれを言おうとしていた」

「キタハラさんは山手の大きな庭付きの一軒家でミュージアムをオープンさせた。大きな犬が白いフェンスの中を走り回っている」

「その通り！そして優雅に日光浴をして、週末の朝、こうして友達とゆっくりモーニングコーヒーを楽しんでいる……」

「周りから、見たらこれこそがサクセス！だ」

「そう！サクセス、極まりない、100%のサクセス」そう言って、キタハラは笑う。

「しかし……」キタハラがそう言うとヤノもリピートする。

「しかし……」

「ボクたちはまだ何もしえていない」二人は一緒になって笑った。

「暇だし……」

「サクセスの^{かけら}欠片さえ、手にしていないよね……」

ヤノは「^{かけら}欠片さえ」と言う、その通りだ。

オープンした時にマスコミは沢山取材に来てくれ、そこでも「夢を叶えた」と答えたが、実際はまだ何も手にしていなかった。

しかし、不思議なものでこうして暇で日光浴をしているとマスコミは「余裕のある成功者だからできる」と持ち上げる。

ヤノも同じだった、夢だったスーパースターのアルバムをデザインしたのは、あくまでもきっかけに過ぎなかったのだ、それをひしひしと感じ始めている。

今まで見たことないギャラが口座に振り込まれたが、金^{かね}は所詮、金^{かね}に過ぎない。このままこのバブルが続くとは到底思えない。バブルは見たこともない金を生み出すが、弾けて始めてバブルだとわかるんだ。

捨て身でデザインした結果、ヤザワさんのアルバムを手がける幸運を掴むことができた。しかし、ここで有頂天になっている場合じゃない。

ヤノは「次」を漠然と考えていた。しかし、それが形になるのはまだ数年先だ。

キタハラもヤノが「次」を計画していることに気づき始めている。

しかし、今はそれを口にしない。

そう、まだ何も始まっていなかったからだ。

時代はまさにバブルという怪物を出現させていた。

そのバブルの中に二人の若者はいた。

二人が成功者に見えた一つの理由はもしかしたら、単純に 1986 年だったということだけかもしれない。

「キタハラさん、ヤザワさんの「成り上がり」で好きなシーンがあるんだ」
ヤノはそう言った。

「教えて？」キタハラはヤノにその内容を問うた。

オレは今 28 で。

五万人の観客を相手にしたら、十万の目が一点を見つめている。

オレだけを怖いくらいの目で射てるんだ。

何も考えてない。

歌っているだけ。

オレには見えないんだよ、その会場が、ね。

逆光線になっている。

ピン・スポットの強烈なやつが十本当たっているから……

むこう側は、まるで、真っ暗なんだ。

「成りあがりのラストシーンさ」ヤノはそう言った。

「ボクはあの小説のそのシーンがたまらなく好きだ、あのシーンを 20 代で読んで、ボクは星になりたいと思ったんだ」ヤノはそう言って、どこか遠くを眺めるように青空を見上げた。

「そんなラストだったっけ、ボクはあまり記憶にないけど、いい話だね」

キタハラは相槌を打つでもなく、ヤノに返事をした。

「ボクは「原宿ゴールドラッシュ」かな、やっぱり……

自分が信じた道を見つけて、そこでサクセスしろと山崎さんはボクに教えてくれた。炭鉱夫の息子に生まれて、廃山になった故郷を捨てるように上京、石炭の代わりに黄金を掘り当てるなんて、何て！ロマンチックだと思ったよ……本の付録についていた種をベランダの鉢植えに植えたからね……」

「いつか、キタハラさんが「原宿ゴールドラッシュ」の続編を書く日が来るかもね……いや、違うか、キタハラさんなら、

さしずめ、ヨコハマゴールドラッシュだ……」

ヤノはキタハラに向かってそう言って、笑った。

エピローグ

「暇だ！」とヤノと笑いあった日から、しばらくするとキタハラがインタビューした記事を目にした若者が日本中から押し寄せた。

そう、人々は待っていたのだ、サクセスを体現してくれる新しいヒーローを！

既成概念を無視し、新しいシャベルで金の山を掘るヒーローの出現を！

山手に突然、出現した誰もなし得なかったプライベートミュージアムは何か、きっと素敵な物語を伝えてくれるだろう……と。

人々はキタハラが語る ^{サクセスストーリー} 物語 を待っていた。

そこを訪れれば、きっと素晴らしき人生の思い出が用意されている。

そんな期待感に胸を膨らませ、小さなミュージアムの前に長い行列を作った。

店にはビートルズが鳴り響いていた。

終わり

もう一つのエピローグ

2020 年新型コロナウイルスが蔓延し、世界中の人々は困難に立ち向かわねばならなくなりました。

世界中で多くの人が死に、または隔離されています。

うつ病になる人も後を絶ちません。

特に順風満帆だった人が、多くうつ病になりました。

今までの成功体験が全く意味をなさなくなったからです。

この世界はしばらく続くとの予測がなされています。

5 年続く、か 10 年になるのが誰も答えを持っていません。

私はこの小説を 2019 年の夏前に執筆を開始しましたが、コロナになり、全く書けなくなりました。

つまり小説の世界より、現実の世界の出来事があまりにインパクトが大きく、小説の枠では表現できないといったジレンマが生じてしまったからです。

もう一つは矢野さんの病気です。

ALS という難病をどこまで書いていいか？それが最大の悩みでした。

本作品はある程度、矢野さんを軸に話を進めていこうと考えていましたが、想像以上に ALS に触れなければならないことは大きな重圧でした。

矢野さんは京橋エドグランのライブを観に来てくれました。

その度に矢野さんと直接会々と、なぜかこの後の文章を書くことができなくなりました。

そんな時、事件が起きました。

2020 年 7 月 23 日に発覚した京都での ALS 者の^{しんたく}囑託殺人事件です。

「殺してくれ」という切実な患者の訴えについては多くの議論がなされました。

もちろん法律的には殺人罪に問われるでしょう。

報道によれば、容疑者の医師らは、「安楽死させてほしい」などとネットに書き込みしていた ALS 者（四肢の麻痺した状態）と SNS で連絡を取り、100 万円以上の対価を得た上で、昨年 11 月 30 日に自宅を訪問して秘密裏に薬物で殺害したというものです。

この事件は私に大きな衝撃を与えましたが、その結果、書くことで向き合うことができ、物語を描き進めることができたのです。

矢野さんが「死にたい」というセリフはもちろんフィクションで、あくまでも私の創作です。

物語の中で矢野さんが死に向き合うことで、私は「家族の絆」をキーワードとして「矢野さんの復活」を書き上げました。

矢野さんは会うたびに笑顔で「ありがとう」と私にお話ししてくれます。

何に対しての「ありがとう」かはわかりません。

ミュージカルを作ったことなのか、この 2 作目を書いていることなのか？

このパンデミックは「世界の終わり」という人もいます。

しかし、矢野さんのここまでの壮絶な生き方を想像すれば、今の世界のどこが、終わりなんだと私は思い、この小説を書き上げることができました。

この物語には二人の主人公がいます。

二人は出会いました。

男女が出会えば恋愛小説になりますが、若い男が二人出会えば、サクセスストーリーになる。

二人は会うことで小さな池から飛び出し、大きな海原の航海に出ます。

矢野さんの病気は現代の医学では難病とされ、まだ効果的な治療方法は見つかっていない。

それでも今、二人が会う瞬間に立ち会っていると、二人は出会った頃の数十年前に戻っているように見えます。

矢野さんはまだ旅の途中、それは難病が完治するという旅です。

二人の思い出は色褪せることはありません。

1部「ゴールドラッシュ風雲篇」と2部「ピュアゴールド」一旦物語は終わりますが、二人の旅はまだまだ続くことでしょう。

1部では幸いにもミュージカルにもなり、多くに人からたくさんの賛辞をいただくことができました。

「この2部もミュージカルにしますか？」と聞かれたので「いや、これはミュージカルじゃなくて、ラジオドラマにしたいと答えました」

理由はラジオなら矢野さんが録音して毎日、聴いてもらえるからです。

ラジオのお仕事をされている方、関係者の方、この小説をお読み頂きましたら、ご一報ください。ぜひラジオドラマ化をお願いします（笑）

70年代に出会い、80年代で夢をつかんだ二人の主人公

あの時の気持ちのまま、一緒に旅をする。

またいつか、この続きが書ける日を願って。

ありがとうございました。

北原照久さん

矢野雅幸さん

心より感謝します。

二人の友情がこの先の見えない未来に希望を与えてくれました。

そしてこの小説に物語を与えてくれたのはタイトルになる「PURE GOLD」

その生みの親、作詞家の売野雅勇さん

ありがとうございました。

この曲がなければこの物語は誕生しなかったです。

鈴木重美

2020年9月14日

引用

「PURE GOLD」作曲 矢沢永吉

作詞 売野雅勇

「トラベリングバス」

「逃亡者」作曲 矢沢永吉

作詞 西岡恭蔵

鎖を引きちぎれ 作曲 矢沢永吉

作詞 山川啓介

「成りあがり」 矢沢永吉（角川書店）

「原宿ゴールドラッシュ」 森永博志

special thanks

尾島あけみ

高井直子

ウイングクラブ

高橋良児（トイズプランニング）

金子慧（トーズ）

網野義彦（株式会社テクトセンス）

表紙デザイン くさまひろゆき

表紙写真提供 若松圭介

著者 鈴木重美

監修 北原照久

矢野雅幸

copyright by Shigemi Suzuki 2020